

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第605集

つるかい
鶴飼遺跡発掘調査報告書

一般国道4号渋民バイパス関連遺跡発掘調査

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第605集

鶴飼遺跡発掘調査報告書

2013

2013

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
(公財) 岩手県文化振興事業団

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
(公財) 岩手県文化振興事業団

鶴飼遺跡発掘調査報告書

一般国道4号渋民バイパス関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業團埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、一般国道4号渋民バイパス建設に関連して平成23年度に発掘調査された盛岡市玉山区鶴飼遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査によって、本遺跡付近は縄文時代後期前葉に居住域として、その廃絶後は狩猟場として用いられていたことが確認されました。これらは、当該地域の縄文社会を考える上で貴重な資料となるものであります。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成25年2月

公益財團法人 岩手県文化振興事業團
理事長 池田克典

例　　言

- 1 本報告書は、岩手県盛岡市玉山区洪民字鶴飼47-15ほかに所在する鶴飼遺跡の発掘調査結果を取録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、一般国道4号洪民バイパスに伴う事前の緊急発掘調査である。調査は国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の委託を受けた公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 岩手県遺跡台帳における遺跡番号は「KE57-1125」、遺跡略号は「TTRK-11」である。
- 4 調査に関わる期間、面積、担当者は次のとおりである。

野外調査

期間：平成23年9月5日～10月28日　面積：4.874m²　担当者：丸山浩治、村上　拓

室内整理

期間：平成24年1月16日～平成24年3月30日

担当者：丸山浩治

- 5 報告書の執筆は、第I章を国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、それ以外は編集・構成を含め丸山が担当した。
- 6 試料の分析・鑑定は次の機関・団体に委託した。
放射性炭素年代測定(AMS測定)・・・株式会社加速器分析研究所
石器石材鑑定・・・・・・・・・・・・花崗岩研究会
- 7 航空写真撮影は東邦航空株式会社に委託した。
- 8 調査および報告書作成にあたり、次の方々から御指導・ご助言をいただいた（順不同・敬称略）。
嶋 千秋（盛岡市文化財保護審議委員）、宇部則保（青森県八戸市教育委員会）
- 9 発掘調査資料は、全て岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 10 調査成果は当センターホームページ、調査概報等に発表してきたが、本書の内容が優先するものである。

凡　　例

1 遺構実測図の用例は下記のとおりである。

- (1) 遺構実測図の縮尺は基本的に次のとおりである。ただし一部異なるものもあるため各図にスケールおよび縮尺を付した。

基本層序等断面図・・・1:50

竪穴住居・・・・・・・1:50

住居内部施設・・・・・・・1:25

土坑・・・・・・・・1:50

石器埋納遺構・・・・1:25

炭窯・・・・・・・・1:50

- (2) 推定線は破線で示した。

- (3) 層位の表記には、基本層序にローマ数字、各遺構埋土にアラビア数字を使用した。

- (4) 土層色調の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を使用した。混入物量(%)の目安もこれを参考にした。

- (5) 図面中の土器は「p」、石器および礫は「s」の略号で表記した。

2 遺物実測図の用例は下記のとおりである。

- (1) 各遺物の縮尺は基本的に次のとおりである。ただし一部異なるものもあるため各図にスケールおよび縮尺を付した。

縄文土器・・・・・・・1:3

剥片石器・・・・・・・2:3

砾石器・・・・・・・1:3

- (2) 遺物の計測値は、残存値の場合()で表記した。

3 國土地理院発行の地形図を転載したものは、図中に図幅名と縮尺を付した。

4 引用・参考文献は巻末にまとめて記した。

目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 遺跡の位置	1
2 地理・地形的環境	1
3 基本層序	4
4 周辺の遺跡	4
III 調査と整理の方法	
1 野外調査	7
2 室内整理	8
IV 検出遺構	
1 壊穴住居	11
2 壊穴住居状遺構	13
3 石器埋納遺構	13
4 土坑	14
5 炭窯	24
V 出土遺物	
1 繩文土器	41
2 石器・石製品	42
VI 自然科学的分析	
1 鶴飼遺跡の放射性炭素年代測定 (AMS測定)	52
VII 総括	
1 立地と遺構	55
2 遺物	56
報告書抄録	77

図版目次

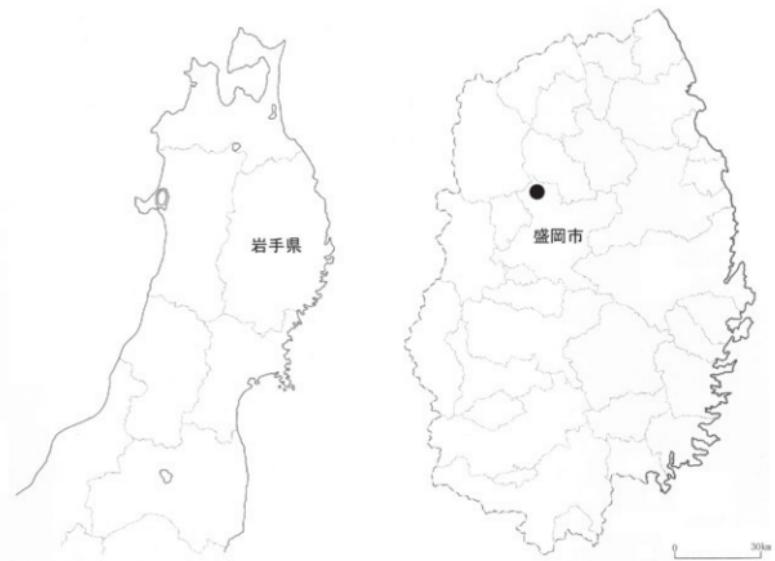
第1図 遺跡の位置	第14図 R D008 ~ 010土坑	33
第2図 地形分類図	2	第15図 R D011・012土坑	34
第3図 周辺の地形	3	第16図 R D013 ~ 015土坑	35
第4図 基本層序	3	第17図 R D016 ~ 019土坑	36
第5図 周辺の遺跡	5	第18図 R D020 ~ 022土坑	37
第6図 遺構配置および等高線図	10	第19図 R D023 ~ 025土坑	38
第7図 R A001堅穴住居	26	第20図 R D026 ~ 028土坑	39
第8図 R A002堅穴住居	27	第21図 R Z002炭窯	40
第9図 R A003堅穴住居	28	第22図 堅穴住居出土土器	44
第10図 R A004堅穴住居	29	第23図 堅穴住居・土坑・遺構出土土器	45
第11図 R E001堅穴住居状遺構、 R Z001石器埋納遺構	30	第24図 遺構出土土器	46
第12図 R D001 ~ 004土坑	31	第25図 堅穴住居出土石器	47
第13図 R D005 ~ 007土坑	32	第26図 堅穴住居・石器埋納遺構・土坑出土石器	48
		第27図 土坑・遺構出土石器	49

表目次

第1表 周辺の遺跡一覧	6	第4表 土器觀察表	50
第2表 遺構名変更一覧	8	第5表 石器觀察表	51
第3表 遺構計測値	25		

写真図版目次

写真図版1 調査区全景、基本層序	59	写真図版10 R D013 ~ 016土坑	68
写真図版2 R A001堅穴住居	60	写真図版11 R D017 ~ 020土坑	69
写真図版3 R A002堅穴住居	61	写真図版12 R D021 ~ 024土坑	70
写真図版4 R A003堅穴住居	62	写真図版13 R D025・026土坑	71
写真図版5 R A004堅穴住居	63	写真図版14 R D027・028土坑、R Z002炭窯	72
写真図版6 R E001堅穴住居状遺構、 R Z001石器埋納遺構	64	写真図版15 堅穴住居出土土器	73
写真図版7 R D001 ~ 004土坑	65	写真図版16 土坑・遺構出土土器	74
写真図版8 R D005 ~ 008土坑	66	写真図版17 堅穴住居出土石器	75
写真図版9 R D009 ~ 012土坑	67	写真図版18 堅穴住居・石器埋納遺構・土坑・ 遺構出土石器	76



I 調査に至る経過

「鶴飼遺跡」は、一般国道4号渋民バイパス改築工事の施工に伴って、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することになったものである。

一般国道4号は、東京都中央区日本橋を起点として、青森県青森市に至る国道で、東北地方の大動脈の一端を担っている主要幹線道路である。

一般国道4号渋民バイパスは、盛岡市玉山区渋民と同区馬場の間、約5.6kmの区間に計画されている。現国道は、ほぼ区の中心を南北に縦断し、全幅員8~12mと狭く、両側に歩道がない状態であり、近年の自動車交通の増大と車両の大型化に伴い、増加する交通需要に対応し、通過交通の分離による交通の円滑化、交通安全の確保及び沿道環境の改善を図ることを目的に昭和61年度に事業着手し、平成8年度から工事着手、平成16年度に一部供用し事業を進めている。

「鶴飼遺跡」については、「武道V遺跡」の隣接地であり遺跡がある可能性がある箇所とされ、平成21年度に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、遺構が確認され「鶴飼遺跡」とされた。その結果に基づいて岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所が協議を行い、発掘調査を公益財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化センターの受託事業とすることとした。

これにより、平成23年5月10日付けて岩手河川国道事務所長と公益財團法人岩手県文化振興事業団理事長との間で受託事業を締結し、「鶴飼遺跡」の発掘調査に着手した。

(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置(第1図)

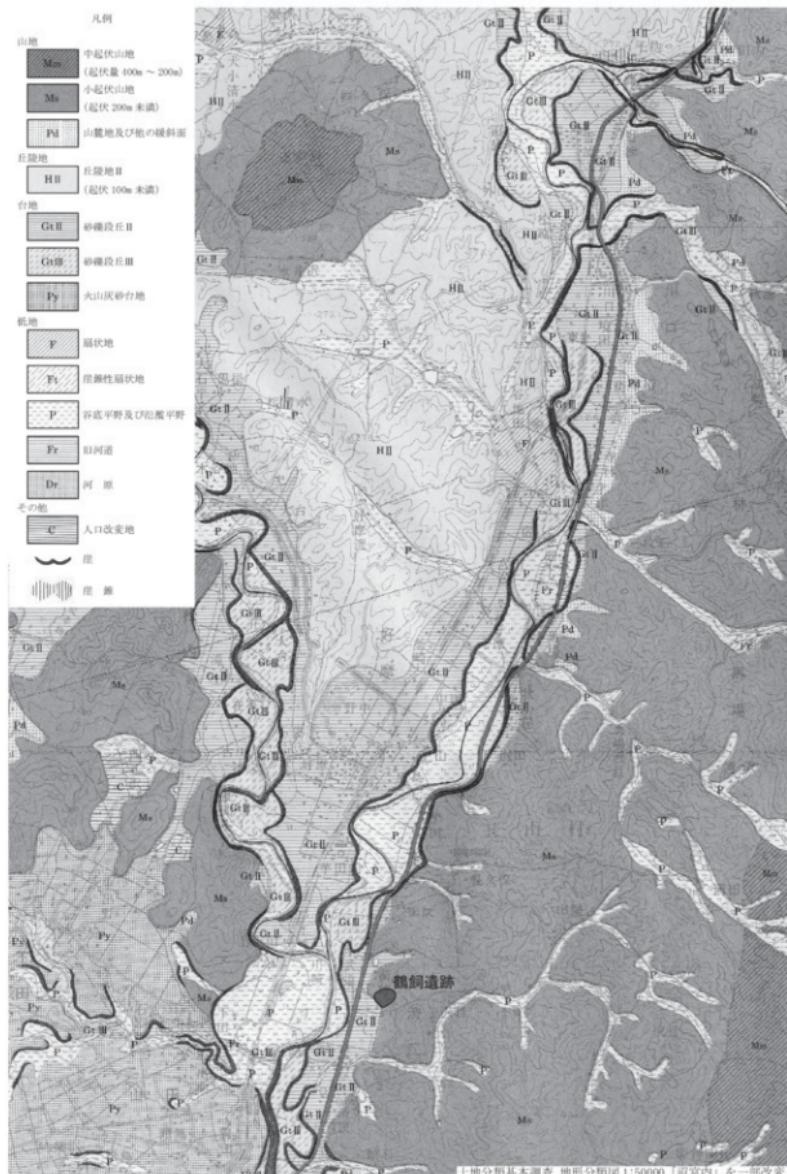
鶴飼遺跡は、IGRいわて銀河鉄道渋民駅の北東約2.6kmに位置する。国土地理院発行の5万分の1地形図「沼宮内」および2万5千分の1地形図「渋民」の図幅中に含まれ、緯度・経度上の位置は、北緯39度51分10秒、東經141度10分30秒付近である。北上川東岸から約500m、姫神山西麓の丘陵末端部に立地する。

2 地理・地形的環境(第2・3図)

遺跡の所在する盛岡市玉山区は、北上川に沿ってひらけた北上盆地の北端に位置する。北には北上川・馬淵川の分水嶺である奥中山高原があり、西には奥羽山脈、東には北上高地が連なる。北上川の水源は岩手郡岩手町御堂付近にあり、玉山区周辺は上流域に区分される。遺跡の立地する玉山区渋民周辺は上流域のなかで比較的河岸段丘の発達が良い地域とされるが、それが顕著なのは北上川西岸であり、東岸は北上高地から続く標高200m以下の小起伏山地が河川間際まで迫っている。

鶴飼遺跡は、この小起伏山地の西端に立地している。遺跡南西縁は地形の変換点で、これより西～南西側は砂礫段丘となる。この段丘は中位段丘とされ(岩手県企画開発室1976)、水野(1960)の好摩段丘相当と考えられる。

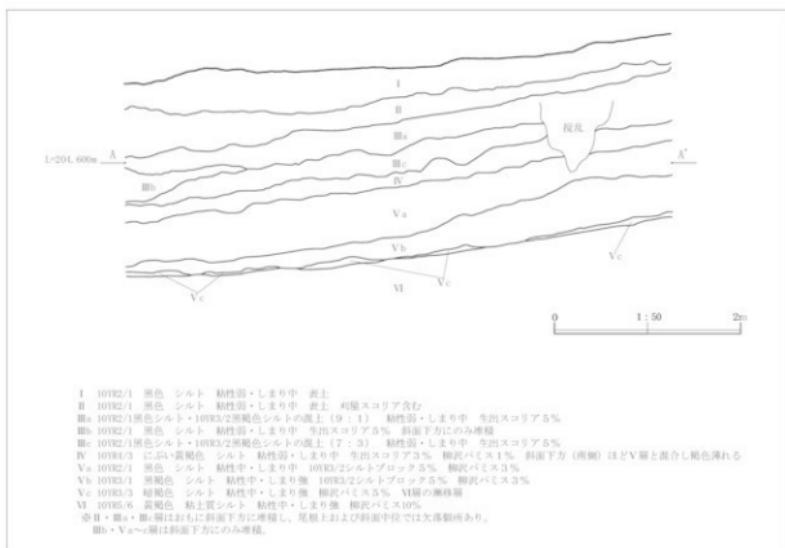
調査区内の微地形は、北側尾根部と南西向き斜面部で構成され、尾根部は幅5m弱とかなり狭い。



第2図 地形分類図



第3図 周辺の地形



第4図 基本層序

斜面部には浅い谷筋が3条存在する。標高は203～215mで、調査前の状況は山林、畠地である。

3 基本層序（第4図、写真図版1）

今次調査区は、狹小な尾根部と南西方向に下る斜面部で構成されており、斜面部には3条の浅い谷地形が形成されている。地点により堆積様相が異なるが、層序的に欠落のない斜面下方の調査区南西端における土層を第4図に示す。

尾根部から斜面上位にかけては、Ⅱ層およびV層が欠落する。斜面下位は全層堆積し、たとえばV層のように大別層中で混入物や色調により細分される層もある。これは、流入土が多いことに起因するもので、明るい色調のIV層などは堆積過程で上下層と混じり、尾根部の色調に比して全体的に黒味が強い。

4 周辺の遺跡（第5図、第1表）

平成22年度までに岩手県遺跡台帳に登録された遺跡のうち、報告遺跡近隣の縄文時代後期、古代の遺跡を抽出し、第5図および第1表に掲載した。以下、各時代の遺跡に関する概要を記し、当該地域における歴史的環境を概観する。

縄文時代後期

図幅内には21遺跡が載る。日戸遺跡（註1）は昭和30年代に岩手大学の草間俊一氏らによって調査された遺跡で、早期の遺物が確認されてことで著名な遺跡である。中期・後期の遺物も相当量出土しており、各期を通じて適地対象となっていた点が注目される。才津沢遺跡（27）では堅穴住居のほか、後期前業の土器が散布されたかのような出土状況を示す土坑が検出されている。

立地に関して、報告遺跡周辺では北上川東岸の砂礫段丘基部から小起伏山地縁辺に多く、より東方・高位の山地内部にも小河川流域を中心に立地が確認されている。北上川西岸でも砂礫段丘～丘陵地上で確認されてはいるが、中～後期以外の縄文全般を見てもその立地割合は東岸よりもかなり低い。

古代

図幅内には50遺跡が載る。芋田Ⅱ遺跡（38）では37棟の堅穴住居が見つかり、墨書き器や耳皿なども出土している。当該期の一大集落であることとともに、官衙との関連性が窺われる遺物の存在が注目される遺跡である。芦名沢Ⅰ遺跡（33）では鍛冶炉や鉄関連遺物が見つかり、当該域における生産活動の一端が垣間見られる。

立地は、縄文時代と同様に北上川東岸の砂礫段丘基部から小起伏山地縁辺に多いが、山地内部での検出数は少ない。一方で、北上川西岸の砂礫段丘上での検出数は縄文時代に比して増加し、松川流域でも確認されるようになり、主要河川流域に集中する傾向が看取される。

註

1 岩手県遺跡台帳に「日戸遺跡」は登録されていないが、古屋敷遺跡（18）がこれにあたると推定されている。



第5図 周辺の遺跡

III 調査と整理の方法

1 野外調査

(1) 調査経過

9月5日 資材搬入、現場設営。試掘開始。
9月6日 重機による表土除去および排土運搬（～9月26日）。遺構検出、精査開始。
9月27日 基準杭打設。
10月7日 久慈工業高校 職員・生徒40名 現場見学。
10月20日 現地公開（10:30～12:00）。参加者29名。
10月21日 航空写真撮影実施。
10月27日 終了確認。資材撤収。
10月28日 重機による埋め戻し。調査終了。

(2) 測量方法（第6図）

野外における測量にあたっては、電子平板システム（株式会社CUBIC製 遺構くんCUBIC2011Ver7.02）を使用した。同システムでは測量情報をすべて座標値で管理し、グリッドを用いないため、本遺跡独自の名称によるグリッドは設定していない。座標は世界測地系を用い、この基準となる杭を調査区内に6点設置した。この杭の名称、座標値、標高値は次のとおりである。

基準点1 X = -16260.000 Y = 29248.000 H = 214.583m
基準点2 X = -16228.000 Y = 29196.000 H = 209.292m
補助点1 X = -16254.000 Y = 29192.000 H = 203.988m
補助点2 X = -16264.000 Y = 29206.000 H = 208.822m
補助点3 X = -16300.000 Y = 29218.000 H = 204.896m
補助点4 X = -16312.000 Y = 29238.000 H = 205.104m

※平成23年5月31日公表の電子基準点成果を使用

なお、盛岡市の調査・管理方針に沿って、2mグリッドの境界隅を遺構図中に表示し、その座標値を明示した。

(3) 粗掘・遺構検出

まず、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課による試掘調査結果を参考に、このトレンチの再掘削を実施した。これは、旧地形とその堆積土層の確認、および遺構・遺物の検出層位と状態の把握が目的である。結果、調査区北部にあたる尾根部から南西に下る斜面の上方はIV層上面を、南部にあたる斜面下方はV層下位からVI層上位を遺構検出面と設定した。この後、同作業が終了した地点から重機による表土および無遺物層の除去を行い、人力による検出を順次行った。

(4) 遺構の調査方法・遺物の取り上げ方

掘り込みを伴う遺構に関して、堅穴住居、堅穴住居状遺構、炭窯などの大形遺構は四分法で、それ

以外は二分法で行っている。いずれの精査においても、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の完掘状況を中心に写真撮影および実測を順次行った。

遺物の取り上げ方は、遺構内出土分については遺構名と出土層位名を記し、このうち床・底面直上以下出土分については個々に出土位置を記録した。遺構外出土遺物に関しては、国土座標数値と層位名を記して取り上げている。

(5) 土坑の分類と呼称

土坑は、平面形態および断面形態の差異によって、フラスコ形土坑、円形土坑、溝形土坑、長楕円形土坑の4種類に分類した。溝形土坑と長楕円形土坑の区別はおもに底部幅をもって行い、幅最狭部が10cm前後からそれ以下となるものを溝形、30cm前後からそれ以上となるものを長楕円形とした。

(6) 写 真 摄 影

写真撮影にあたっては、デジタル一眼レフカメラ(Canon EOS 5Dおよび50D)と6×9判モノクロームのフィルムカメラ(FUJI GSW690Ⅲ)を使用した。撮影にあたっては、撮影状況を記した「撮影カード」を事前に写し、整理時の混乱を防止した。その他、調査終了間際にセスナ機による航空写真撮影を実施している(平成23年10月21日)。

2 室 内 整 理

(1) 遺構名の変更(第2表)

室内整理段階において、遺構名を盛岡市教育委員会が指定する略号に変更した。変更前後の名称は第2表のとおりである。

第2表 遺構名変更一覧

旧	新	旧	新
SI01	→ RA001堅穴住居	SK14	→ RD014溝形土坑
SI02	→ RA002堅穴住居	SK15	→ RD015長楕円形土坑
SI03	→ RA003堅穴住居	SK16	→ RD016円形土坑
S1状04	→ RE001堅穴住居状遺構	SK17	→ RD017フラスコ形土坑
S105	→ RA004堅穴住居	SK18	→ RD018円形土坑
SK01	→ RD001円形土坑	SK19	→ RD019円形土坑
SK02	→ RD002溝形土坑	SK20	→ RD020溝形土坑
SK03	→ RD003長楕円形土坑	SK21	→ RD021長楕円形土坑
SK04	→ RD004溝形土坑	SK22	→ RD022溝形土坑
SK05	→ RD005円形土坑	SK23	→ RD023溝形土坑
SK06	→ RD006円形土坑	SK24	→ RD024円形土坑
SK07	→ RD007円形土坑	SK25	→ RD025円形土坑
SK08	→ RD008円形土坑	SK26	→ RD026フラスコ形土坑
SK09	→ RD009長楕円形土坑	SK27	→ RD027長楕円形土坑
SK10	→ RD010円形土坑	SK28	→ RD028円形土坑
SK11	→ RD011円形土坑	SX01	→ RZ002炭窯
SK12	→ RD012円形土坑	SX02	→ RZ001石器埋納遺構
SK13	→ RD013溝形土坑		

（2）遺物整理の方法と掲載基準

遺物は、各種別に分類したのち出土地点ごとに重量計測を行い、接合作業を実施して掲載分と不掲載分に細分類し、前者については仮番号を付し登録を行った。登録にあたっては、種別ごとに異なる種類の番号を付している。その後、報告書掲載遺物が最終的に決定した段階で、新たに各種別共通となるアラビア数字の連番による掲載番号を付した。

なお、掲載遺物の選択に際しては、各遺物種別共通してまず第一に出土地点を優先し、I層あるいは搅乱出土遺物は基本的に除外した。遺構別および遺物種別毎の出土量についてはIV章「検出遺構」で記載している。

本報告書では、出土遺物量の記載を遺物種により2種類の方法で行っている。一つは「g」あるいは「kg」単位での重量表記で、土器は基本的にこの表記である。土器の計量は出土地点単位ごとに実施し、全体量を把握するための重量台帳を作成した。もう一つは点数記載を主としたもので、石器はこの方法で表記し、これに重量を併記している。

各遺物種別の掲載基準は下記のとおりである。

縄文土器

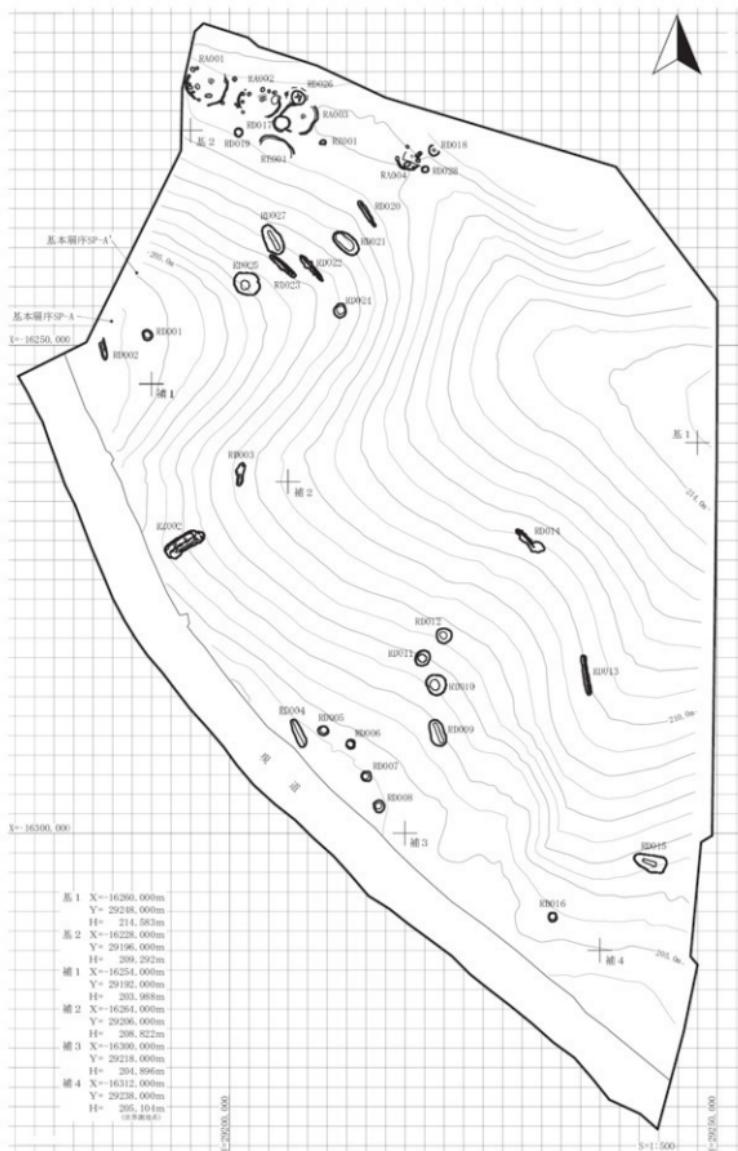
- 掲載遺物の選択基準…口縁部もしくは底部が径の1/4以上残存し復元実測が可能な個体は全点掲載した。破片資料は、文様および形態変化が集中する理由から、口縁部が残存するものを優先している。
- 実測…文様の表現については客觀性を重要視し、拓本を多用した。上記のとおり、径の推定可能なもの（1/4以上残存）は復元実測を行った。

石器

- 掲載遺物の選択基準…最低限、各器種（細分類ごと）1点は掲載することとし、完形品を優先した。写真掲載のみとしたものもある。
- 実測…調整部位や打面・打点など、加工・使用痕のある部位を実測対象面とし、個別に展開を設定した。

（2）遺物写真撮影

遺物の写真撮影は、当センター写真室において、専属の撮影技士がデジタル一眼レフカメラ（Canon EOS1 Mark II）を用い実施した。撮影箇所に関しては、実測図と写真が相互補完関係になることを意識し、設定した。



第6図 遺構配置および等高線図

IV 検出遺構

今回の調査で検出された遺構は、堅穴住居4棟、堅穴住居状遺構1基、石器埋納遺構1基、土坑28基、炭窯1基である。以下、遺構種別毎に記述する。

1 堅穴住居

R A001堅穴住居

遺構（第7図、写真図版2）

【位置・検出状況】X = -16.224、Y = 29.198付近に位置する。IV層上面で検出された。尾根上西側にR A002が隣接する。

【微地形】西に延びる狭小な尾根の頂部にある。

【規模・平面形】南北が土壤流出により消失し不明である。残存する東西方向の規模は、開口部径約4.2m、底面径約3.9mを測る。平面形は円形基調である。

【壁・床面・深さ】壁は残存状態が悪く、判然としない。堅穴の掘削はVI層まで行われており、床面に貼り床等の痕跡は認められない。深さは最深部で14cmである。

【埋土】7層に分層される。埋土中央に黒色～黒褐色シルトが、周縁に暗褐色・にぶい黄褐色シルトの混土が堆積する。後者は人為堆積の可能性がある。

【炉】石開炉で、堅穴の中心からやや北東側に寄った位置に構築されている。炉石設置に関わる掘り方の形状から、平面は西一東に軸を持つ方形基調であったものと考えられる。北側以外は残存状態が悪く、炉石・掘り方ともに消失している。残存規模は82×69cmである。焼土範囲は円形基調で57×57cmを測る。

【ピット】遺構内および周辺から12個検出された。規模や埋土は第7図に示したとおりである。P 1～8は壁柱穴と考えられる。P 9・10は性格不明である。P 11・12は遺構外に位置しており、本遺構に伴うものか不明である。

遺物（第22・25図、写真図版15・17）

【土器】埋土から225.4g出土した。うち、P 10埋土出土の1点（1）を掲載している。

【石器】炉構成材に台石2点および穿孔礫1点が含まれていた。このほか、埋土から礫石器剥片1点が出土し、総重量は1,375.8gである。うち、台石（34）と穿孔礫（35）各1点を掲載した。

時期 出土土器から、縄文時代後期前葉と考えられる。

R A002堅穴住居

遺構（第8図、写真図版3）

【位置・検出状況】X = 16.225、Y = 29.203付近に位置する。IV層上面で検出された。尾根上西側にR A001、同東側にR A003が隣接する。

【微地形】西に延びる狭小な尾根の頂部にある。

【規模・平面形】南北が土壤流出により消失し不明である。残存する東西方向の規模は、開口部径約4.3m、底面径約4.1mを測る。平面形は円形基調である。

【壁・床面・深さ】壁は残存状態が悪く、判然としない。堅穴の掘削はVI層まで行われており、床面

に貼り床等の痕跡は認められない。深さは最深部で10cmである。

【埋土】 堪穴本体は2層に分層される。主体は黒褐色シルトで、所々にIV層起源のぶい黄褐色シルトが混じる。3~6層は埋設土器の掘り方およびピットの埋土である。

【炉】 石開炉で、堪穴の中心からやや北東側に寄った位置に構築されている。炉石設置に関わる掘り方の形状から、平面は南西一北東に軸を持つ方形基調であったものと考えられる。西・南側は残存状態が悪く、炉石・掘り方ともに消失している。残存規模は92×72cmである。焼土範囲は楕円形基調で62×51cmを測る。

【埋設土器】 堪穴東壁際に位置する。掘り方規模は開口部105×74cm・底部68×44cmで、この北東端はピット1と重複しこれに切られる。土器は正立状態で埋設され、上半部が欠損している。

【ピット】 遺構内および周辺から10個検出された。規模や埋土は第8図に示したとおりである。P1~7は柱穴の可能性がある。この場合、おそらく壁柱穴と考えられるが、P5などはより内部に入り込んでおり、判然としない。P8~10は遺構外に位置しており、本遺構に伴うものが不明である。

遺物（第22・25図、写真図版15・17）

【土器】 床面、床面直上、埋土から計403.2g出土した。うち、埋設土器（2）、床面直上出土の口縁部片2点（3・4）、埋土出土の口縁部片1点（5）の計4点を掲載した。

【石器】 床面から石礫1点（36）、炉構成材から敲石1点（37）および台石2点（39・40）、床面直上から凹磨石1点（38）、埋土から石匙1点（41）が出土し、全点を掲載した。総重量は4,273.7gである。

時期 出土土器から、縄文時代後期前葉と考えられる。

R A003堪穴住居

遺構（第9図、写真図版4）

【位置・検出状況】 X=-16.227、Y=29.207付近に位置する。IV層上面で検出された。

【重複】 RD017およびRD026と重複し、何れにも切られる。西側にRA002、南西側にRE001が隣接する。

【微地形】 西に延びる狭小な尾根の頂部にあたる。

【規模・平面形】 南西一北東に長軸を持つ楕円形基調であるが、南北の一部が土壤流出により消失し不明である。残存規模は、開口部径約4.0m、底面径約3.6mを測る。

【壁・床面・深さ】 壁は45°以下で緩く立ちあがる。堪穴の掘削はVI層まで行われており、床面に貼り床等の痕跡は認められない。深さは最深部で20cmである。

【埋土】 3層に分層される（1・3・4層）。上位層は黒色～黒褐色シルト主体、下位層は黒褐色～褐色シルト主体である。2・5~21層はRD017の埋土である。

【炉】 堪穴の中心からやや北東側に寄った位置に構築されている。範囲南側に扁平環が立位で埋設されており、石開炉であったと思われる。焼土は不整形で46×41cmを測る。

遺物（第22・23・26図、写真図版15・18）

【土器】 埋土から計1,618.1g出土した。うち、7個体・10点を掲載した（6~12）。

【石器】 床面から台石1点、床面直上から凹石と石器素材各1点、埋土から削器2点と剝片3点（うち1点は礫石器剝片）の計8点・3,686.3gが出土した。このうち、台石（43）、凹石（42）、削器（44・45）の計4点を掲載した。

時期 出土土器から、縄文時代後期前葉と考えられる。

R A004堅穴住居

遺構（第10図、写真図版5）

【位置・検出状況】X = -16.231, Y = 29.218付近に位置する。I層直下のVI層面で検出された。尾根上東側にR D018・028が隣接する。

【微地形】西に延びる狭小な尾根の頂部にある。

【規模・平面形】土壤流出が著しく、南壁の一部を残し他辺は残存しない。よって平面形・規模とも不明である。

【壁・床面・深さ】既述のように壁はほとんど残存しない。堅穴の掘削はVI層中まで行われている。残存床面には貼り床等の痕跡は認められない。深さは最深部で7cmである。

【埋土】2層に分層される。壁際にはにぶい黄褐色～褐色シルトが堆積している。上位には黒褐色シルトが薄く確認された。

【炉】堅穴プランが不明瞭なため推定となるが、堅穴の中心からやや北東側に寄った位置に構築されたものと思われる。焼土は楕円形基調で46×41cmを測る。焼土西側に疊が残置しているが、構築疊か否か不明である。

【ピット】遺構内に位置すると思われるピットが6個検出された。うち、P 2～4・6の4個は壁柱穴の可能性がある。P 1・6は南西一北東に長軸を持つ楕円形を呈する。機能は不明である。

遺物 出土しなかった。

時期 出土土器から、縄文時代後期前葉と考えられる。

2 堅穴住居状遺構**R E001堅穴住居状遺構**

遺構（第11図、写真図版6）

【位置・検出状況】X = -16.230, Y = 29.205付近に位置する。IV層上面で検出された。北側尾根上にR A群が隣接する。

【微地形】西に延びる狭小な尾根の南側落ち際にある。

【規模・平面形】斜面下部にあたる南側が土壤流出により2/3以上消失しており、平面形・規模ともに不明である。

【壁・底面・深さ】残存する北壁は30°以下で緩やかに立ちあがる。堅穴の掘削はVI層まで行われており、底面に貼り床等の痕跡は認められない。深さは最深部で28cmである。

【埋土】暗褐色シルトと黒褐色シルトの混合土である。

遺物 出土しなかった。

時期 埋土の様相から、堅穴住居群と同じ時代（縄文時代後期前葉）の所産と考えられる。

3 石器埋納遺構**R Z001石器埋納遺構**

遺構（第11図、写真図版6）

【位置・検出状況】X = -16.229, Y = 29.210付近に位置する。IV層上面で検出された。北西側にR A 003がある。

〔微地形〕 堅穴住居群と同じく、西に延びる狭小な尾根の頂部に立地する。

〔規模・平面形〕 楕円形基調で、南西—北東に長軸を持つ。開口部径62×47cm、底面径53×34cmを測る。
〔断面形・底面・深さ〕 壁は直線的で、断面は逆台形を呈する。底面はほぼ水平である。深さは最深部で14cmである。

〔埋土〕 暗褐色シルトの單層である。

遺物 (第26図、写真図版18)

〔遺存状況〕 3点の礫が、遺構のはば中央から重なった状態で出土した。一部は底面と接しているが、間に埋土が介在している部分も多い。礫の在り方は人為的であることから、土とともに埋納されたものと考えられる。

〔石器〕 埋納礫3点 (1.348.1g) のうち、2点には使用痕が確認され、これを掲載した (46・47)。46は凹石、47磨石で、いずれも石質は安山岩である。

〔時期〕 遺物は縄文時代に帰属するものである。同一面上に立地する堅穴住居群と一連の施設である可能性が高く、縄文時代後期前葉の所産と考えられる。

4 土 坑

R D001円形土坑

遺構 (第12図、写真図版7)

〔位置・検出状況〕 X = -16.249、Y = 29.192付近に位置する。V層下位で検出された。南西側にR D 002がある。

〔微地形〕 南西に下る谷部の緩斜面上にあたる。

〔規模・平面形〕 開口部径109×95cm、底面径76×59cmを測る。平面形は円形基調である。

〔断面形・底面・深さ〕 断面形はビーカー形を呈し、底面はほぼ平坦である。湧水が多い場所で、土壤に鉄分を多く含むことから底面は硬化していた。深さは最深部で70cmを測る。

〔埋土〕 8層に分層される。黒色～黒褐色シルト主体で、壁面近くにVI層起源の黄褐色粘土が混在する。最上位中央には焼土が薄く堆積する。同斜面に立地し自然埋没したと思われる他の遺構は黒褐色系と褐色系の土が混在するのに対し、本遺構の埋土は大半が黒色系であること、加えて最上位の焼土の存在から、本遺構の埋土は人為堆積であり、埋め戻し後に火を燃やした何らかの儀礼的行為があったものと考えられる。

遺物 出土しなかった。

〔時期〕 検出層位および遺構形態から、縄文時代と考えられる。

R D002溝形土坑

遺構 (第12図、写真図版7)

〔位置・検出状況〕 調査区西際のX = -16.250、Y = 29.187付近に位置する。V b層で検出された。ただし、断面観察の結果から本来の遺構構築面はIV層中と確認された。北東側にR D 001がある。

〔微地形〕 南西に下る緩斜面の谷筋内にあたる。

〔規模・平面形〕 溝形で、長軸方向はN-12°-Wである。調査区外へ統くため長さは不明で、幅は開口部で56cm、底部で16～34cmを測る。

〔断面形・底面・深さ〕 断面形は漏斗状を呈する。底部は基本的に細く、本来は20cm以下であったと

考えられる。底面は概ね平坦で、杭痕等はない。R D001と同様に湧水が多い場所で、土壤に鉄分を多く含むことから底面は硬化していた。深さは最深部で85cmである。

【埋土】9層に分層される。主体は黒色シルトであるが、所々に暗褐色シルトや褐色粘土が介在する。自然堆積と考えられる。

遺物 出土しなかった。

時期 検出層位および遺構形態から、縄文時代と考えられる。構築面が堅穴住居群よりも上位であることから、これらの廃絶後の縄文時代後期以降といえる。なお、同じ谷筋内に立地し同形態を呈するR D020、R D022、R D023は同時期の所産である。

R D003長楕円形土坑

遺構（第12図、写真図版7）

【位置・検出状況】X = -16.263、Y = 29.201付近に位置する。VI層上面で検出された。

【微地形】南西に下る斜面上にあたる。

【規模・平面形】溝形で、長軸方向はN- 9° -Eである。開口部233×79cm、底部114×32cmを測る。

【断面形・底面・深さ】断面形は椀状を呈するが不整で、底面も凹凸が顕著である。杭痕等は確認されない。深さは最深部で67cmである。

【埋土】5層に分層される。黒褐色シルト層とこれににぶい黄褐色シルトが混ざった層が交互に堆積する。自然堆積と考えられる。

遺物 出土していない。

時期 検出層位から縄文時代の所産と考えられるが、詳細は不明である。

R D004溝形土坑

遺構（第12図、写真図版7）

【位置・検出状況】X = -16.290、Y = 29.207付近に位置する。V層下位で検出された。南東側にR D005～008が隣接する。

【微地形】南西に下る緩斜面の谷部内にあたる。

【規模・平面形】溝形で、長軸方向はN-24° -Wである。開口部300×93cm、底部282×25cmを測る。

【断面形・底面・深さ】断面形は漏斗状を呈する。底部は幅細で、最狭部は12cmである。おおむね平坦で、杭痕等は確認されない。深さは最深部で134cmである。

【埋土】13層に分層される。黒色～黒褐色シルト、暗褐色シルト、灰黃褐色～黃褐色シルトおよび粘土の各層が交互に堆積もしくは混在している。自然堆積と考えられる。

遺物 出土していない。

時期 遺構形態から、R D002と同じく縄文時代（後期以降）といえる。とくに、同一地形上に立地するR D013、R D014は同時期に同じ集団によって構築された可能性が高い。

R D005円形土坑

遺構（第13図、写真図版8）

【位置・検出状況】X = -16.289、Y = 29.210付近に位置する。V層下位で検出された。南東側にR D006、西側にR D004がある。

【微地形】南西に下る緩斜面の谷部内にあたる。

【規模・平面形】開口部径107×93cm、底面径69×64cmを測る。平面形は円形基調である。

【断面形・底面・深さ】断面形はビーカー形を呈し、底面はほぼ平坦である。深さは最深部で110cmを測る。

【埋土】17層に分層される。黒色～黒褐色シルト、にぶい黄褐色～黄褐色シルト・粘土質シルトの各層およびこれらの混合層が互層を成す。自然堆積と考えられる。

遺物 出土しなかった。

時期 検出層位および遺構形態から、縄文時代と考えられる。なお、同一形態で弧状に並ぶR D 006、R D 007、R D 008は同時期に同じ集団によって構築された可能性が高い。

R D006円形土坑

遺構 (第13図、写真図版8)

【位置・検出状況】X = -16.291、Y = 29.212付近に位置する。V層下位で検出された。北西側にR D 005、南東側にR D 007がある。

【微地形】南西に下る緩斜面の谷部内にあたる。

【規模・平面形】開口部径93×89cm、底面径73×63cmを測る。平面形は円形基調である。

【断面形・底面・深さ】断面形はビーカー形を呈し、底面はほぼ平坦である。深さは最深部で140cmを測る。

【埋土】18層に分層される。黒色～黒褐色シルト、灰黄褐色～黄褐色シルト・粘土質シルトの各層およびこれらの混合層が互層を成す。自然堆積と考えられる。

遺物 出土しなかった。

時期 検出層位および遺構形態から、縄文時代と考えられる。なお、同一形態で弧状に並ぶR D 005、R D 007、R D 008は同時期に同じ集団によって構築された可能性が高い。

R D007円形土坑

遺構 (第13図、写真図版8)

【位置・検出状況】X = -16.294、Y = 29.214付近に位置する。V層下位で検出された。北西側にR D 006、南東側にR D 008がある。

【微地形】南西に下る緩斜面の谷部内にあたる。

【規模・平面形】開口部径107×100cm、底面径62×60cmを測る。平面形は円形基調である。

【断面形・底面・深さ】断面形はビーカー形を呈し、底面はほぼ平坦である。深さは最深部で138cmを測る。

【埋土】21層に分層される。黒色～暗褐色シルト、褐色～黄褐色粘土質シルトの各層およびこれらの混合層が互層を成す。自然堆積と考えられる。

遺物 出土しなかった。

時期 検出層位および遺構形態から、縄文時代と考えられる。なお、同一形態で弧状に並ぶR D 005、R D 006、R D 008は同時期に同じ集団によって構築された可能性が高い。

R D008円形土坑

遺構 (第14図、写真図版8)

[位置・検出状況] X = -16.297, Y = 29.215付近に位置する。V層下位で検出された。北西側にR D 007がある。

[微地形] 南西に下る緩斜面の谷部内にあたる。

[規模・平面形] 開口部径124×108cm、底面径67×61cmを測る。平面形は円形基調である。

[断面形・底面・深さ] 断面形はビーカー形を呈し、底面はほぼ平坦である。深さは最深部で138cmを測る。

[埋土] 19層に分層される。黒色～暗褐色シルト、にぶい黄褐色～黄褐色シルト・粘土質シルトの各層およびこれらの混合層が互層を成す。自然堆積と考えられる。

遺物 出土しなかった。

時期 検出層位および遺構形態から、縄文時代と考えられる。なお、同一形態で弧状に並ぶR D 005、R D 006、R D 007は同時期に同じ集団によって構築された可能性が高い。

R D009長楕円形土坑

遺構 (第14図、写真図版9)

[位置・検出状況] X = -16.290, Y = 29.221付近に位置する。IV層上面で検出された。北側にR D010がある。

[微地形] 南西に下る緩斜面の谷筋内にあたる。

[規模・平面形] 長楕円形で、長軸方向はN-23°-Wである。開口部277×155cm、底部220×40cmを測る。

[断面形・底面・深さ] 断面形は漏斗状を呈するが、R D002などと異なり底部幅が最狭部でも37cmと大きい。底面は概ね平坦で、杭痕等は確認されない。深さは最深部で98cmである。

[埋土] 10層に分層される。黒色～黒褐色シルト、にぶい黄褐色～黄褐色シルト・粘土質シルトの各層およびこれらの混合層が互層を成す。自然堆積と考えられる。

遺物 出土していない。

時期 検出層位から縄文時代と考えられる。類似形態のR D015、R D027と同時期の所産と捉えられる。

R D010円形土坑

遺構 (第14図、写真図版9)

[位置・検出状況] X = -16.285, Y = 29.221付近に位置する。IV層上面で検出された。北西側にR D 011がある。

[微地形] 南西に下る緩斜面の谷筋内にあたる。

[規模・平面形] 開口部径213×204cm、底面径110×94cmを測る。平面形は円形基調である。

[断面形・底面・深さ] 断面下部はビーカー形を呈し、上部はラッパ状に開く。底面はほぼ平坦である。深さは最深部で141cmを測る。

[埋土] 23層に分層される。黒色～暗褐色シルト、灰黃褐色～黃褐色シルトの各層およびこれらの混合層が互層を成す。自然堆積と考えられる。

遺物 出土しなかった。

時期 検出層位および遺構形態から、縄文時代と考えられる。なお、同じ谷筋内に近接するR D

011、R D012は同時期に同じ集団によって構築された可能性が高い。

R D011円形土坑

遺構（第15図、写真図版9）

【位置・検出状況】X = -16.282、Y = 29.220付近に位置する。IV層上面で検出された。南東側にR D010、北東側にR D012がある。

【微地形】南西に下る緩斜面の谷筋内にあたる。

【規模・平面形】開口部径167×135cm、底面径82×78cmを測る。平面形は円形基調である。

【断面形・底面・深さ】断面下部はピーカー形を呈し、上部はラッパ状に開く。底面はほぼ平坦である。深さは最深部で180cmを測る。

【埋土】25層に分層される。黒褐色～暗褐色シルト、灰黄褐色～黄褐色シルトの各層およびこれらの混合層が互層を成す。自然堆積と考えられる。

遺物 出土しなかった。

時期 検出層位および遺構形態から、縄文時代と考えられる。なお、同じ谷筋内に近接するR D010、R D012は同時期に同じ集団によって構築された可能性が高い。

R D012円形土坑

遺構（第15図、写真図版9）

【位置・検出状況】X = -16.280、Y = 29.222付近に位置する。IV層上面で検出された。南西側にR D012がある。

【微地形】南西に下る緩斜面の谷筋内にあたる。

【規模・平面形】開口部径158×154cm、底面径75×64cmを測る。平面形は円形基調である。

【断面形・底面・深さ】断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。深さは最深部で120cmを測る。

【埋土】21層に分層される。黒色～暗褐色シルト、灰黄褐色～褐色シルトの各層およびこれらの混合層が互層を成す。自然堆積と考えられる。

遺物 出土しなかった。

時期 検出層位および遺構形態から、縄文時代と考えられる。なお、同じ谷筋内に近接するR D010、R D011は同時期に同じ集団によって構築された可能性が高い。

R D013溝形土坑

遺構（第16図、写真図版10）

【位置・検出状況】X = -16.284、Y = 29.236付近に位置する。IV層上面で検出された。北西側にR D014がある。

【微地形】南西に下る斜面上にあたる。

【規模・平面形】溝形で、長軸方向はN- 9° -Wである。開口部406×54cm、底部385×18cmを測る。

【断面形・底面・深さ】断面形は漏斗状を呈する。底部は幅細で、最狭部は9cmである。おおむね平坦で、杭痕等は確認されない。深さは最深部で94cmである。

【埋土】10層に分層される。黒色～黒褐色シルト、暗褐色シルト、褐色～黄褐色シルトの各層およびこれらの混合層が互層を成す。自然堆積と考えられる。

遺物（第23図、写真図版16）

〔土器〕 検出面から胴部片1点・14.9gが出土し、これを掲載した(13)。

時期 検出層位および遺構形態から、RD002と同じく縄文時代（後期以降）といえる。とくに、同一地形上に立地するRD004、RD014は同時期に同じ集団によって構築された可能性が高い。

R D014溝形土坑

遺構（第16図、写真図版10）

〔位置・検出状況〕 X = -16.270、Y = 29.230付近に位置する。IV層上面で検出された。南東側にRD013がある。

〔微地形〕 南西に下る斜面上にあたる。

〔規模・平面形〕 溝形で、長軸方向はN-46°-Wである。南東端は1m程度のテラス状の広がりを持つが、これが構築時の形態を示すものか否か不明である。溝形部分の規模は、開口部256×74cm、底部247×25cmを測る。

〔断面形・底面・深さ〕 断面形は漏斗状を呈する。底部は幅細で、最狭部は8cmである。おおむね平坦で、杭痕等は確認されない。深さは最深部で116cmである。

〔埋土〕 12層に分層される。黒色～黒褐色シルト、にぶい黄褐色～黄褐色シルトの各層およびこれらの混合層が互層を成す。自然堆積と考えられる。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および遺構形態から、RD002と同じく縄文時代（後期以降）といえる。とくに、同一地形上に立地するRD004、RD013は同時期に同じ集団によって構築された可能性が高い。

R D015長楕円形土坑

遺構（第16図、写真図版10）

〔位置・検出状況〕 X = -16.303、Y = 29.243付近に位置する。IV層上面で検出された。

〔微地形〕 南西に下る緩斜面の谷筋内にあたる。

〔規模・平面形〕 長楕円形で、長軸方向はN-69°-Wである。開口部337×171cm、底部146×44cmを測る。

〔断面形・底面・深さ〕 下半はビーカー状を呈するが、上半はラッパ状に開く。RD002などと異なり底部幅が最狭部でも27cmと太い。底面は概ね平坦で、杭痕等は確認されない。深さは最深部で89cmである。

〔埋土〕 11層に分層される。黒色～黒褐色シルト、灰黄褐色～黄褐色シルトの各層およびこれらの混合層が互層を成す。自然堆積と考えられる。

遺物 出土していない。

時期 検出層位から縄文時代と考えられる。類似形態のRD009、RD027と同時期の所産と捉えられる。

R D016円形土坑

遺構（第17図、写真図版10）

〔位置・検出状況〕 X = -16.308、Y = 29.233付近に位置する。V層下位で検出された。

〔微地形〕 南西に下る緩斜面上にあたる。

〔規模・平面形〕 開口部径93×80cm、底面径65×62cmを測る。平面形は円形基調である。

〔断面形・底面・深さ〕 断面形はビーカー形を呈し、底面はほぼ平坦である。深さは最深部で105cmを

測る。

【埋土】 12層に分層される。黒褐色～暗褐色シルト、灰黄褐色～黄褐色シルトの各層およびこれらの混合層が互層を成す。自然堆積と考えられる。

遺物 出土しなかった。

時期 検出層位および遺構形態から、縄文時代と考えられる。

R D017 フラスコ形土坑

遺構（第17図、写真図版11）

【位置・検出状況】 X = -16.227、Y = 29.205付近に位置する。IV層上面で検出された。

【重複】 R A003と重複し、これを切る。

【微地形】 西に延びる狹小な尾根の頂部にあたる。

【規模・平面形】 開口部径172×153cm、底面径146×140cmを測る。平面形は円形基調である。

【断面形・底面・深さ】 開口部下約60cmの付近が径約110cm程度まで括れ、断面形はフラスコ形を呈する。底面はほぼ平坦である。深さは最深部で118cmを測る。

【埋土】 21層に分層される。1層はR A003と共通の埋土である。黒色～暗褐色シルト、灰黄褐色～黄褐色シルト、粘土質シルトの各層およびこれらの混合層が互層を成す。自然堆積と考えられる。

遺物（第23・26図、写真図版16・18）

【土器】 埋土から108.8g出土した。うち胴部片3点（14～16）を掲載した。

【石器】 埋土から石鏃、削器、礫（砥石？）が各1点ずつ計3点・69.7g出土した。うち、石鏃（48）、削器（49）を掲載した。

時期 検出層位および遺構形態から、縄文時代と考えられる。R A003の廃絶後に構築されており、後期前葉以降の所産といえる。R D026と同時期の可能性が高い。なお、埋土19層から検出された炭化物に対し、AMS法による放射性炭素年代測定を実施した。 ^{14}C 年代は $3810 \pm 30\text{yrBP}$ 、曆年較正年代（ 1σ ）は68.2%の確率で2286～2205cal BCの範囲に含まれるという結果が示されている（詳しくはVI章参照）。この年代値は縄文後期前葉を示し、発掘調査結果とも調和する。

R D018 円形土坑

遺構（第17図、写真図版11）

【位置・検出状況】 X = -16.230、Y = 29.221付近に位置する。IV層上面で検出された。

【微地形】 尾根上から北東に下る緩斜面の上部にあたる。

【規模・平面形】 北側が土壤流出により消失し不明である。遺構上位も相当消失しているものと考えられる。残存規模は開口部112cm、底面100cmを測る。平面形は円形基調である。

【断面形・底面・深さ】 断面形はピーカー形を呈するものと思われる。土坑本体の底面はほぼ平坦で、深さは最深部で35cmを測る。さらに、底面中央には開口部径29×24cm、底面径21×18cm、深さ12cmの副穴が1個ある。

【埋土】 2層に分層される。黒色シルト主体である。自然堆積と考えられる。

遺物 出土しなかった。

時期 検出層位および遺構形態から、縄文時代と考えられる。

R D019円形土坑

遺構（第17図、写真図版11）

【位置・検出状況】 X = -16.228, Y = 29.201付近に位置する。IV層上面で検出された。

【微地形】 尾根上から南西に下る緩斜面の上部にあたる。

【規模・平面形】 開口部径85×83cm、底面径69×65cmを測る。平面形は円形基調である。

【断面形・底面・深さ】 断面形はビーカー形を呈するものと思われる。底面はほぼ平坦である。深さは最深部で36cmを測る。

【埋土】 4層に分層される。黒褐色シルト主体で、黒色・褐色シルトなどが部分的に混じる。自然堆積と考えられる。

遺物（第23・27図、写真図版16・18）

【土器】 埋土から口縁部片1点・5.3gが出土し、これを掲載した（17）。

【石器】 埋土から敲石1点・169.7gが出土し、これを掲載した（50）。

時期 検出層位、出土土器から縄文時代と考えられる。

R D020溝形土坑

遺構（第18図、写真図版11）

【位置・検出状況】 X = -16.236, Y = 29.214付近に位置する。IV層上面で検出された。南西側にR D 021が隣接する。

【微地形】 尾根上から南西に下る緩斜面の上部、谷筋内にあたる。

【規模・平面形】 溝形で、長軸方向はN-34°-Wである。開口部309×53cm、底部269×8cmを測る。

【断面形・底面・深さ】 断面形は漏斗状を呈する。底部は幅細で、最狭部は4cmである。おおむね平坦で、杭痕等は確認されない。深さは最深部で113cmである。

【埋土】 12層に分層される。黒色～黒褐色シルト、灰黄褐色～褐色シルトの各層およびこれらの混合層が互層を成す。自然堆積と考えられる。

遺物（第23図、写真図版16）

【土器】 埋土から胴部片1点・23.8gが出土しこれを掲載した（18）。

時期 検出層位および遺構形態から、R D002と同じく縄文時代（後期以降）といえる。とくに、同じ谷筋内に立地するR D002、R D022、R D023は同時期に同じ集団によって構築された可能性が高い。

R D021長楕円形土坑

遺構（第18図、写真図版12）

【位置・検出状況】 X = -16.240, Y = 29.212付近に位置する。IV層上面で検出された。北西側にR D 020、南西側にR D022がある。

【微地形】 南西に下る緩斜面の谷筋内にあたる。

【規模・平面形】 長楕円形で、長軸方向はN-48°-Wである。開口部300×160cm、底部224×91cmを測る。

【断面形・底面・深さ】 下半はビーカー状を呈するが、上半はラッパ状に開く。底面は概ね平坦で、杭痕等は確認されない。深さは最深部で129cmである。

【埋土】 20層に分層される。黒色～黒褐色シルト、灰黄褐色～黄褐色シルトの各層およびこれらの混合層が互層を成す。自然堆積と考えられる。

遺物 出土していない。

時期 検出層位から縄文時代と考えられる。他の長椭円形土坑と同時期の可能性がある。

R D022溝形土坑

遺構 (第18図、写真図版12)

[位置・検出状況] X = -16.242、Y = 29.208付近に位置する。IV層上面で検出された。南西側にR D 023が隣接する。

[微地形] 南西に下る緩斜面の谷筋内にあたる。

[規模・平面形] 溝形で、長軸方向はN-42°-Wである。開口部338×64cm、底部319×7cmを測る。

[断面形・底面・深さ] 断面形は漏斗状を呈する。底部は幅細で、最狭部は5cmである。おおむね平坦で、杭痕等は確認されない。深さは最深部で136cmである。

[埋土] 17層に分層される。黒色～黒褐色シルト、暗褐色シルト、灰黄褐色～褐色シルトの各層およびこれらの混合層が互層を成す。自然堆積と考えられる。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および遺構形態から、R D002と同じく縄文時代（後期以降）といえる。とくに、同じ谷筋内に立地するR D002、R D020、R D023は同時期に同じ集団によって構築された可能性が高い。

R D023溝形土坑

遺構 (第19図、写真図版12)

[位置・検出状況] X = -16.242、Y = 29.205付近に位置する。IV層上面で検出された。北東側にR D 022が隣接する。

[微地形] 南西に下る緩斜面の谷筋内にあたる。

[規模・平面形] 溝形で、長軸方向はN-49°-Wである。開口部332×62cm、底部278×10cmを測る。

[断面形・底面・深さ] 断面形は漏斗状を呈する。底部は幅細で、最狭部は5cmである。おおむね平坦で、杭痕等は確認されない。深さは最深部で135cmである。

[埋土] 12層に分層される。黒色～黒褐色シルト、暗褐色シルト、褐色シルトの各層およびこれらの混合層が互層を成す。自然堆積と考えられる。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および遺構形態から、R D002と同じく縄文時代（後期以降）といえる。とくに、同じ谷筋内に立地するR D002、R D020、R D022は同時期に同じ集団によって構築された可能性が高い。

R D024円形土坑

遺構 (第19図、写真図版12)

[位置・検出状況] X = -16.246、Y = 29.211付近に位置する。IV層上面で検出された。北西側にR D 022がある。

[微地形] 南西に下る緩斜面の谷筋内にあたる。

[規模・平面形] 開口部径147×124cm、底面径90×83cmを測る。平面形は円形基調である。

[断面形・底面・深さ] 断面形はピーカー形を呈するものと思われる。底面はほぼ平坦である。深さ

は最深部で77cmを測る。

【埋土】 5層に分層される。黒色シルト主体で、壁際に黒褐色・黄褐色シルトが混じる。埋没初期は黒色シルトのみが流入する環境だったらしく、底面を覆うように成層している。自然堆積と考えられる。

遺物 出土していない。

時期 検出層位から縄文時代と考えられる。

R D025円形土坑

遺構 (第19図、写真図版13)

【位置・検出状況】 X = -16.244、Y = 29.202付近に位置する。IV層上面で検出された。北東側にR D 023・027がある。

【微地形】 南西に下る緩斜面の谷筋内にあたる。

【規模・平面形】 開口部径275×226cm、底面径93×90cmを測る。平面形は下半部を見る限り円形基調で、上半部は崩落のためかいくぶん不整形を呈する。

【断面形・底面・深さ】 断面形は下半がピーカー状を呈し、上半はラッパ状に開く。土坑本体の底面はほぼ平坦で、深さは最深部で173cmを測る。さらに、底面中央には開口部径33×27cm、底面径27×21cm、深さ49cmの副穴が1個ある。

【埋土】 29層に分層される。黒色～暗褐色シルト、灰黄褐色～黄褐色シルト・粘土質シルトの各層およびこれらの混合層が互層を成す。自然堆積と考えられる。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および遺構形態から、縄文時代と考えられる。

R D026フラスコ形土坑

遺構 (第20図、写真図版13)

【位置・検出状況】 X = -16.225、Y = 29.207付近に位置する。IV層上面で検出された。

【重複】 R A003と重複し、これを切る。

【微地形】 西に延びる狹小な尾根の頂部から北側に下る緩斜面の上部にあたる。

【規模・平面形】 開口部径149×131cm、底面径220×173cmを測る。平面形は円形基調である。

【断面形・底面・深さ】 開口部下約40cmの付近が径110～115cm程度まで括れ、断面形はフラスコ形を呈する。深さは最深部で141cmを測る。底面には長さ約85cm、幅約5cm、深さ5cmの十字の溝が掘られ、その中央には副穴がある。副穴は、開口部径27×24cm、底面径18×15cm、深さ8cmである。

【埋土】 22層に分層される。黒色～暗褐色、褐灰色～黄褐色シルトの各層およびこれらの混合層が互層を成す。自然堆積と考えられる。

遺物 (第27図、写真図版18)

【土器】 埋土中から905.1g出土した。

【石器】 埋土中から砥石1点、949.6gが出土し、これを掲載した(51)。

【時期】 検出層位および遺構形態から、縄文時代と考えられる。R A003の廃絶後に構築されており、後期前葉以降の所産といえる。R D017と同時期の可能性が高い。なお、埋土最下層から検出された炭化物に対し、AMS法による放射性炭素年代測定を実施した。¹⁴C年代は3760±30yrBP、暦年較正年代(1σ)は61.4%の確率で2206～2138cal BC、6.8%の確率で2271～2259cal BCの範囲に含まれる

という結果が示されている（詳しくはVI章参照）。この年代値は縄文後期前葉を示し、発掘調査結果とも調和する。

R D027長楕円形土坑

遺構（第20図、写真図版14）

【位置・検出状況】 X = -16.239、Y = 29.204付近に位置する。IV層上面で検出された。南側にR D023が近接する。

【微地形】 南西に下る緩斜面の谷筋内にあたる。

【規模・平面形】 長楕円形で、長軸方向はN-29°-Wである。開口部323×174cm、底部223×45cmを測る。

【断面形・底面・深さ】 断面形は漏斗状を呈するが、R D002などと異なり底部幅が最狭部でも35cmと太い。底面は概ね平坦で、杭痕等は確認されない。深さは最深部で172cmである。

【埋土】 29層に分層される。黒色～黒褐色シルト、灰黄褐色～黄褐色シルトの各層およびこれらの混合層が互層を成す。自然堆積と考えられる。

遺物 出土していない。

時期 検出層位から縄文時代と考えられる。類似形態のR D009、R D015と同時期の所産と捉えられる。

R D028円形土坑

遺構（第20図、写真図版14）

【位置・検出状況】 X = -16.232、Y = 29.220付近に位置する。IV層上面で検出された。北西側にRA 004がある。

【微地形】 西に延びる狭小な尾根の頂部にあたる。

【規模・平面形】 開口部径70×59cm、底面径58×50cmを測る。平面形は円形基調である。

【断面形・底面・深さ】 断面形はピーカー状を呈し、底面はほぼ平坦である。深さは最深部で25cmを測る。

【埋土】 6層に分層される。黒褐色シルト、褐灰色～黄褐色シルトが互層を成す。埋没初期は黒褐色シルトのみが流入する環境だったらしく、底面を覆うように成層している。自然堆積と考えられる。

遺物 出土していない。

時期 検出層位から、縄文時代と考えられる。

5 炭 窯

RZ002炭窯

遺構（第21図、写真図版14）

【位置・検出状況】 X = -16.270、Y = 29.196付近に位置する。表土直下のⅢ層中で検出された。

【微地形】 南西に下る緩斜面上にあたる。

【規模・平面形・深さ】 傾斜に直交する方向に長軸を持つ長方形を呈し、斜面上部側には円形土坑状の張り出しを有する。本体の規模は、開口部352×150cm、底面328×118cm、深さ72cmである。円形張り出し部は開口部107×107cm、底面91×80cm、深さ76cmである。長軸方向はN-59°-Eを向く。

【断面形・底面】 壁の立ち上がりは、斜面下部となる南西側のみ存在せず、他はほぼ垂直に立ちあがる。底面には、長軸方向の中央および両端部に計3条、短軸方向やや南西寄りに1条の小溝が構築されて

いる。この深さはそれぞれ5cm程度である。

[焼土・炭化物] 北西壁中央や斜面上方寄りに焼土が形成されており、壁面中位から検出面にかけて広がる。炭化物は長軸方向中央の底面小溝付近の埋土5層から底面にかけてまとまって残存していた。

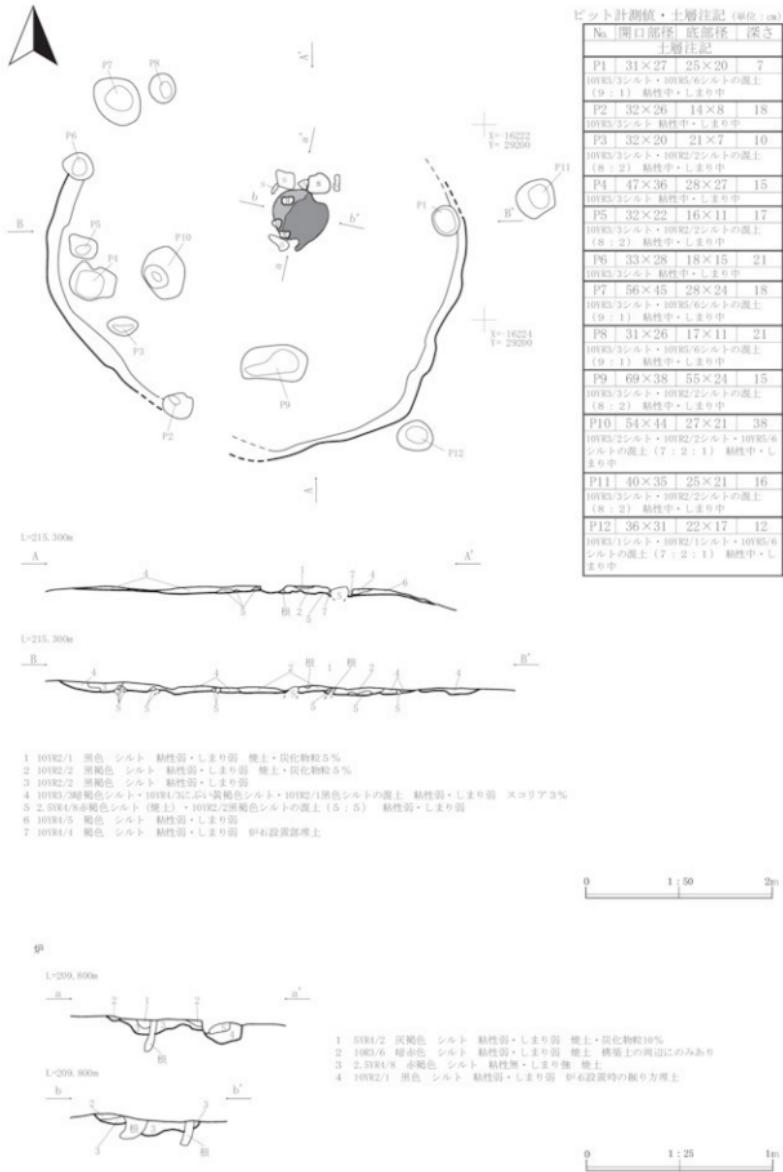
[埋土] 14層に分層される。いずれも黒色～暗褐色シルト主体である。底面近くの5層には多量の炭化物が含まれる。少なくともこの5層以下は本遺構使用時の堆積である。また、円形張り出し部中位にあたる12層には焼土が混じる。同層以下も遺構使用時の堆積といえる。

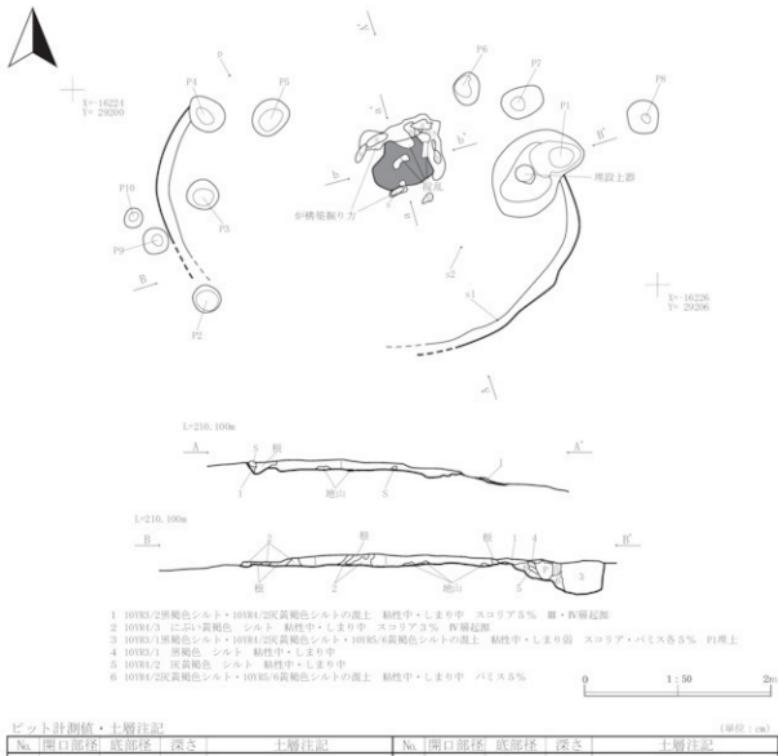
遺物 出土していない。

時期 埋土6層出土炭化物に対し、AMS法による放射性炭素年代測定を実施した。 ^{14}C 年代は1000±20yrBP、暦年較正年代（ 1σ ）は54.6%の確率で1012～1033cal AD、13.6%の確率で996～1007cal ADの範囲に含まれるという結果が示されている（詳しくはVI章参照）。時期推定資料はこれ以外になく、これに従えば11世紀前後の遺構ということになる。

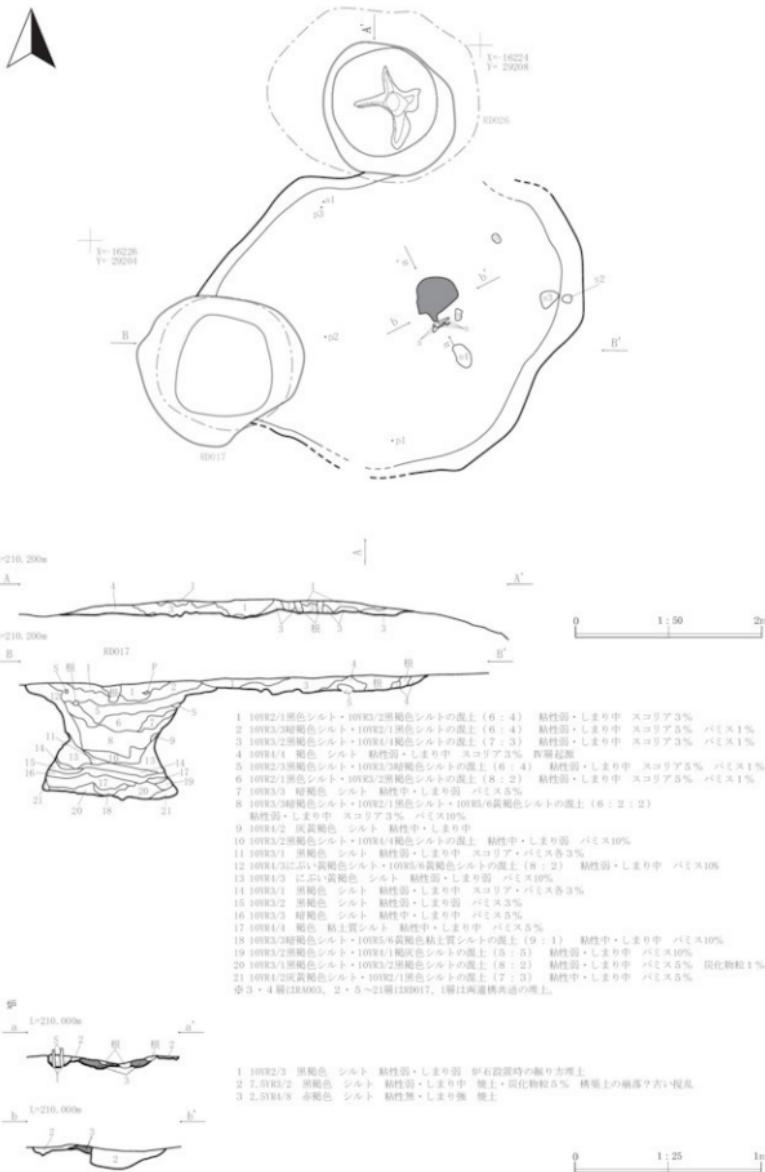
第3表 遺構計測値

				単位：cm			
遺構名	開口部	床・底部	深さ	遺構名	開口部	床・底部	深さ
R A001	419×?	390×?	14	R D015	337×171	146×44	89
R A002	434×?	410×?	10	R D016	93×80	65×62	105
R A003	406以上×312	355以上×288	20	R D017	172×153	146×140	118
R A004	265以上	250以上	7	R D018	112×?	100×?	35
R E001	370以上	340以上	28	R D018内副穴	29×24	21×18	12
R Z001	62×47	53×34	14	R D019	85×83	69×65	36
R D001	109×95	76×59	70	R D020	309×53	269×8	113
R D002	230以上×56	220以上×34	85	R D021	300×160	224×91	129
R D003	233×79	114×32	67	R D022	338×64	319×7	136
R D004	300×93	282×25	134	R D023	332×62	278×10	135
R D005	107×93	69×64	110	R D024	147×124	90×83	77
R D006	93×89	73×63	140	R D025	275×226	93×90	173
R D007	107×100	62×60	138	R D025内副穴	33×27	27×21	49
R D008	124×108	67×61	138	R D026	149×131	220×173	141
R D009	277×155	220×40	98	R D026内副穴	27×24	18×15	8
R D010	213×204	110×94	141	R D027	323×174	223×45	172
R D011	167×135	82×78	180	R D028	70×59	58×50	25
R D012	158×154	75×64	120	R Z002本体	352×150	328×118	72
R D013	406×54	385×18	94	R Z002張り出し部	167×107	91×80	76
R D014	256以上×74	247×25	116				

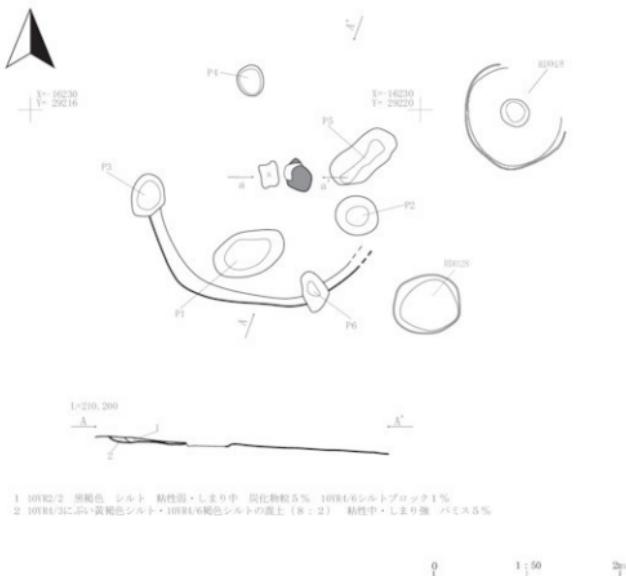




第8図 RA002 壁穴住居



第9図 RA003 堅穴住居



1 10VR2/2 黒褐色 シルト 粘性弱・しまり中 塩化物5% 10VR4/6シルトプロック1%
2 10VR4/3に5%黄褐色シルト・10VR4/6褐色シルトの混土 (8:2) 粘性中・しまり強 ハミス5%

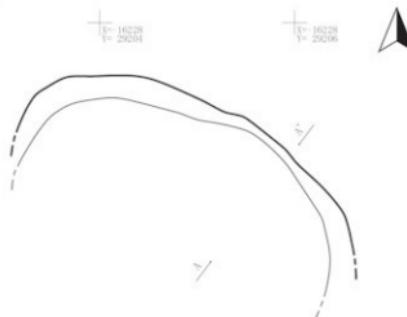
ピット計測値・土層注記					(単位: cm)				
No.	開口部径	底部径	深さ	土層注記	No.	開口部径	底部径	深さ	土層注記
P1	76×46	50×31	21	10VR3/シルト・10VR4/2シルト・ 10VR2/1シルトの混土 (8:3:2) 粘性中・しまり中 塩化物5%	P4	31×27	26×22	8	10VR3/1シルト・10VR4/ゴルトの混土 (7:3) 粘性中・しまり中
P2	45×41	24×20	12	10VR3/シルト・10VR4/2シルト・ 10VR2/1シルトの混土 (8:3:2) 粘性中・しまり中 塩化物5%	P5	75×38	56×16	30	10VR4/3シルト・10VR3/1シルトの混土 (7:3) 粘性中・しまり中
P3	45×36	30×24	10	10VR3/2シルト・10VR4/2シルト・ 10VR2/1シルトの混土 (8:3:2) 粘性中・しまり中 塩化物5%	P6	42×28	18×10	28	10VR3/2シルト・10VR4/2シルト・ 10VR2/1シルトの混土 (8:3:2) 粘性中・しまり中 塩化物5%



第10図 RA004 積穴住居

堅穴住居状遺構 土器埋設遺構

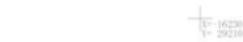
RE001



1 1003/3暗褐色シルト・1003/1帯褐色シルトの混土（8：2） 緊性泥・しまり中 スコリア3%



RZ001

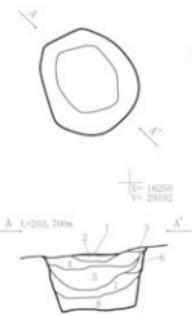


1 1003/3 帯褐色 シルト 緊性泥・しまり中 スコリア3%



第11図 RE001 堅穴住居状遺構、RZ001 石器埋納遺構

RD001

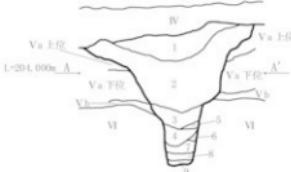


- 1 10Y3/1 棕赤褐色 シルト 粘性中・しまり弱 壤土
- 2 10YR1/7 黒色 シルト 粘性中・しまり弱
- 3 10YR2/1 黑褐色シルト・10YR3/6棕褐色粘土の混土 (5 : 5) 粘性中・しまり中
- 4 10YR2/1 黑色 シルト 粘性中・しまり中
- 5 10YR2/1 黑色 シルト 粘性中・しまり中 10YR5/6粘土ブロック 5%
- 6 10YR5/6 黄褐色 粘土 粘性強・しまり中
- 7 10YR2/1 黑色 シルト 粘性中・しまり中
- 8 10YR2/1 黑色～棕褐色 シルト 粘性中・しまり中

RD002

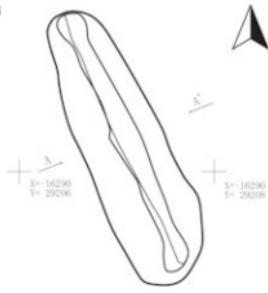


X= 16250 Y= 29186 X= 16250 Y= 29188

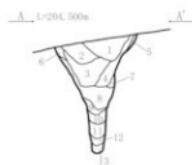


- 1 10YR2/5/1 黑～黑褐色 シルト 粘性中・しまり弱
- 2 10YR2/1 黑色 シルト 粘性強・しまり弱 スコリア・バース各 5%
- 3 10YR2/1 黑色 シルト 粘性中・しまり弱 10YR5/6粘土粒 1%
- 4 10YR2/1 黑色シルト・10YR3/6棕褐色シルトの混土 (7 : 3) 粘性中・しまり弱 スコリア・バース各 7%
- 5 10YR2/1 黑色 シルト 粘性中・しまり弱 10YR5/6粘土粒 5%
- 6 10YR3/6棕褐色シルト・10YR2/1黑褐色シルトの混土 (9 : 1) 粘性中・しまり弱
- 7 10YR2/1 黑色 シルト 粘性中・しまり弱
- 8 10YR1/6 黑色 粘土 粘性強・しまり弱 10YR2/1シルト粒 3%
- 9 10YR2/1 黑色 シルト 粘性中・しまり中

RD004



X= 16290 Y= 29208 X= 16290 Y= 29208



- 1 10YR3/1 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり弱
- 2 10YR2/1 黑色 シルト 粘性弱・しまり中
- 3 10YR2/1 黑褐色シルト・10YR3/6棕褐色シルトの混土 (6 : 4) 粘性弱・しまり中 スコリア・バース各 5%
- 4 10YR3/6棕褐色シルト・10YR1/1黑褐色シルトの混土 (6 : 4) 粘性弱・しまり弱
- 5 10YR2/0 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中
- 6 10YR2/0 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中
- 7 10YR1/4 黑色 粘土 粘性弱・しまり中
- 8 10YR1/3 黑褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり中 バリス 3%
- 9 10YR1/2 反氣褐色 シルト 粘性弱・しまり中
- 10 10YR1/2 黑褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり中
- 11 10YR2/1 黑色 粘土質シルト 粘性中・しまり強
- 12 10YR2/1 黑褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり弱 10YR5/6棕褐色粘土質シルトの混土 5%
- 13 10YR2/1 黑褐色粘土質シルト 粘性中・しまり中 10YR5/6棕褐色粘土質シルトの混土

0 1 : 50 2m

RD003

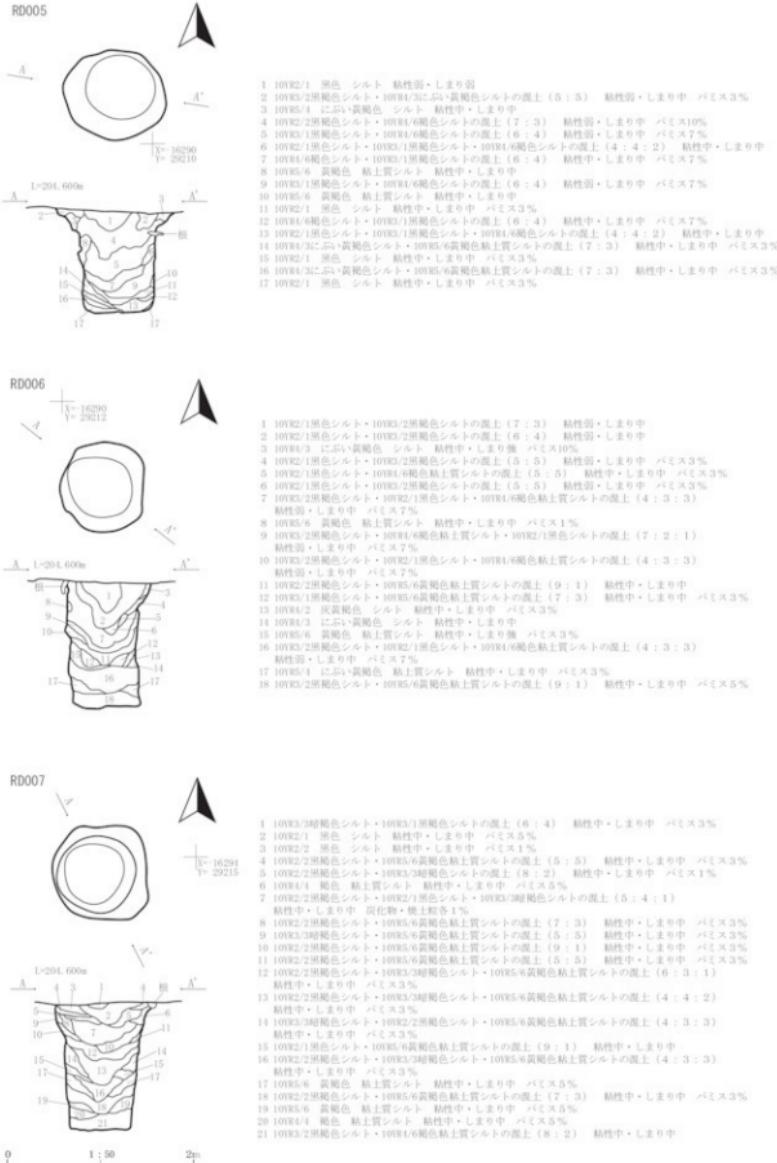


X= 16261 Y= 29200 X= 16264 Y= 29202



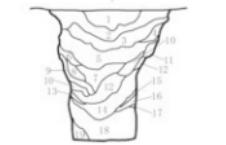
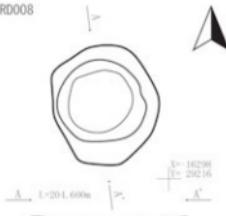
- 1 10YR3/1 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中 粗粒及
- 2 10YR3/2 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中 スコリア 3%
- 3 10YR3/2黑褐色シルト・10YR4/3に近い黄褐色シルトの混土 (7 : 3) 粘性弱・しまり弱
- 4 10YR3/2 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中 スコリア 3%
- 5 10YR3/2黑褐色シルト・10YR4/3に近い黄褐色シルトの混土 (5 : 5) 粘性弱・しまり中 スコリア 5%

第12図 RD001 ~ 004 土坑

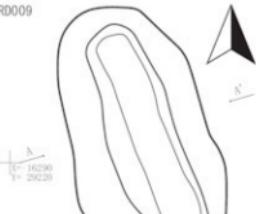


第13図 RD005 ~ 007 土坑

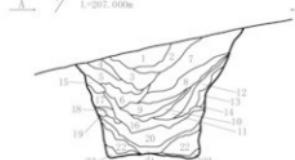
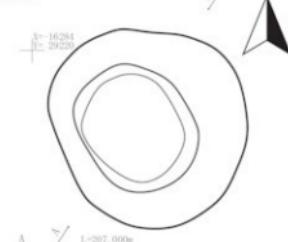
RD008



RD009



RD010



RD008

- 1 10R2/1黒色シルト・10R3/2黒褐色シルトの混土 (5 : 5) 黏性中・しまり中 バミス10%
- 2 10R3/3暗褐色シルト・10R3/2黒褐色シルト・10R2/1黒色シルトの混土 (5 : 4 : 1) 黏性中・しまり中 バミス10%
- 3 10R3/3暗褐色シルト・10R2/3に5分い黄褐色シルト・10R3/2黒褐色シルトの混土 (5 : 3 : 2) 黏性中・しまり中 バミス5%
- 4 10R2/3暗褐色シルト・10R3/3に5分い黄褐色シルトの混土 (5 : 5) 黏性中・しまり中 バミス5%
- 5 10R3/3暗褐色シルト・10R3/2黒褐色シルト・10R2/1黒色シルトの混土 (5 : 4 : 1) 黏性中・しまり中 バミス10%
- 6 10R3/3暗褐色シルト・10R3/3に5分い黄褐色シルトの混土 (6 : 4) 黏性中・しまり中 バミス5%
- 7 10R3/2黒褐色シルト・10R3/3に5分い黒褐色シルト・10R3/6黃褐色粘土質シルトの混土 (6 : 2 : 2) 黏性中・しまり中 バミス5%
- 8 10R3/6黃褐色粘土質シルト・10R2/1黒色シルト・10R3/2黒褐色シルトの混土 (4 : 3 : 3) 黏性中・しまり中 バミス10%
- 9 10R3/6に5分い黄褐色シルト・10R3/6黃褐色粘土質シルトの混土 (5 : 5)
- 10 10R2/1黒色シルト・10R3/3に5分い黄褐色シルトの混土 (7 : 3) 黏性中・しまり中 10R2/1黒色シルト・10R3/5に5分い黄褐色粘土質シルトの混土 (5 : 5) 黏性中・しまり中 バミス10%
- 11 10R2/2黒色シルト・10R3/3に5分い黒褐色シルト・10R3/6黃褐色粘土質シルトの混土 (4 : 4 : 2) 黏性中・しまり中 バミス10%
- 12 10R3/3暗褐色シルト・10R3/6黃褐色粘土質シルトの混土 (7 : 3) 黏性中・しまり中 10R2/2黒色シルト・10R3/6黃褐色粘土質シルトの混土 (5 : 5 : 2) 黏性中・しまり中 バミス10%
- 13 10R3/6黃褐色粘土質シルト・10R3/6黃褐色粘土質シルトの混土 (7 : 3) 黏性中・しまり中 10R3/3暗褐色シルト・10R3/6黃褐色粘土質シルトの混土 (6 : 4)
- 14 10R3/2黒色シルト・10R3/6黃褐色粘土質シルト・10R3/2黒褐色シルトの混土 (5 : 3 : 2) 黏性中・しまり中 バミス10%
- 15 10R3/2黒褐色シルト・10R3/3に5分い黄褐色シルト・10R3/6黃褐色粘土質シルトの混土 (4 : 4 : 2) 黏性中・しまり中 バミス5%
- 16 10R3/2黒色シルト・10R3/6黃褐色粘土質シルト・10R3/2黒褐色シルトの混土 (5 : 3 : 2) 黏性中・しまり中 バミス10%
- 17 10R3/3暗褐色シルト・10R3/3に5分い黄褐色シルト・10R3/6黃褐色粘土質シルトの混土 (4 : 4 : 2) 黏性中・しまり中 バミス5%
- 18 10R3/3に5分い黄褐色シルト・10R3/3暗褐色シルトの混土 (6 : 3 : 1) 黏性中・しまり中 バミス10%
- 19 10R3/3に5分い黄褐色シルト・10R3/3暗褐色シルトの混土 (6 : 4) 黏性中・しまり中 バミス5%

RD009

- 1 10R3/3 黃褐色 シルト 黏性弱・しまり弱 規範
- 2 10R3/2 黑褐色 シルト 黏性弱・しまり弱 スクリア・バミス各3%
- 3 10R3/2 黑褐色 シルト 黏性弱・しまり弱 スコア3%
- 4 10R3/1 黄褐色 シルト・10R2/1 黑色シルト・10R3/6 黃褐色シルトの混土 (4 : 3 : 3) 黏性弱・しまり中 スコアア・バミス5%
- 5 10R3/2 黑褐色 シルト 黏性弱・しまり中
- 6 10R3/1 黑褐色シルト・10R3/3に5分い 黄褐色シルトの混土 (7 : 3) 黏性弱・しまり中 10R3/6 黃褐色シルト・10R3/6 黃褐色シルトの混土 (5 : 3 : 2) 黏性中・しまり中 バミス10%
- 7 10R3/6 黄褐色 シルト 黏土質シルト 粘性中・しまり中 10R3/2シルト モヤ状に5%
- 8 10R3/2 黑褐色シルト・10R3/3に5分い 黄褐色シルト・10R2/1 黑色シルトの混土 (6 : 3 : 1) 黏性弱・しまり中 バミス3%
- 9 10R3/1 黄褐色粘土質シルト・10R3/6 黃褐色粘土質シルトの混土 (6 : 4)
- 10 10R3/1 黄褐色粘土質シルト・10R2/1 黑色シルト・10R3/6 黃褐色粘土質シルトの混土 黏性中・しまり中 バミス5%

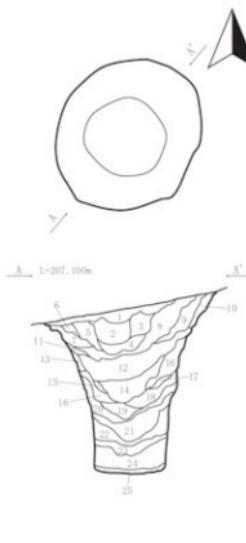
RD010

- 1 10R3/1 黑褐色シルト・10R3/3暗褐色シルトの混土 (6 : 4) 黏性弱・しまり中 バミス3%
- 2 10R3/1 黑褐色シルト・10R2/1暗褐色シルトの混土 (6 : 4) 黏性弱・しまり中 バミス3%
- 3 10R3/1 黑褐色シルト・10R2/1暗褐色シルトの混土 (9 : 1) 黏性弱・しまり中 バミス1%
- 4 10R3/1 黑褐色 シルト 黏性弱・しまり中 バミス1%
- 5 10R3/1 黑褐色シルト・10R3/4褐色シルト・10R3/2 黑褐色シルトの混土 (6 : 3 : 1) 黏性弱・しまり中 バミス3%
- 6 10R3/1 黑褐色シルト・10R3/6 黃褐色シルトの混土 (9 : 1) 黏性弱・しまり中 バミス4%
- 7 10R3/2 黑褐色シルト・10R3/1 黑褐色シルトの混土 (7 : 3) 黏性弱・しまり中 バミス3%
- 8 10R3/2.5 黑褐色 シルト 黏性弱・しまり中 バミス3%
- 9 10R3/2 黑褐色 シルト 黏性弱・しまり中 バミス1%
- 10 10R3/1 黑褐色 シルト 黏性弱・しまり中 バミス1%
- 11 10R3/2 黄褐色シルト・10R3/4褐色シルトの混土 (5 : 5) 黏性弱・しまり中 バミス3%
- 12 10R3/2 黑褐色シルト・10R3/1 黑褐色シルトの混土 (6 : 4) 黏性弱・しまり中 バミス3%
- 13 10R3/2 黑褐色シルト・10R3/6 黃褐色シルトの混土 (5 : 5) 黏性弱・しまり中 バミス3%
- 14 10R3/6 黄褐色 シルト 黏性弱・しまり中 バミス3%
- 15 10R3/1 黑褐色シルト・10R3/4褐色シルトの混土 (6 : 4) 黏性弱・しまり中 バミス3%
- 16 10R2/1 黑色シルト・10R3/1 黑褐色シルト・10R3/6 黃褐色シルトの混土 (6 : 3 : 1) 黏性弱・しまり中 バミス3%
- 17 10R3/1 黑褐色シルト・10R3/3に5分い 黄褐色シルトの混土 (5 : 5) 黏性弱・しまり中 バミス3%
- 18 10R3/1 黑褐色シルト・10R3/6 黃褐色シルトの混土 (9 : 1) 黏性弱・しまり中 バミス3%
- 19 10R3/1 黑褐色シルト・10R3/6 黃褐色シルトの混土 (6 : 4) 黏性弱・しまり中 バミス3%
- 20 10R3/2 黑褐色シルト・10R3/6 黃褐色シルト・10R3/1 黑褐色シルトの混土 (5 : 3 : 2) 黏性弱・しまり中 バミス3%
- 21 10R3/2 黑褐色 シルト 黏性弱・しまり中
- 22 10R3/2 黄褐色シルト・10R3/6 黃褐色シルトの混土 (5 : 5) 黏性弱・しまり中 バミス5%
- 23 10R3/2 黑色シルト・10R3/6 黄褐色シルトの混土 (9 : 1) 黏性弱・しまり中 バミス3%



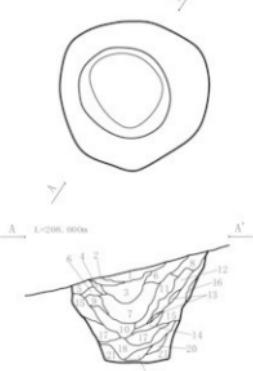
第14図 RD008～010 土壌

RD011

E=16292
Y=29218

- 1 10R3/2黒褐色シルト・10R2/2黒褐色シルト・10R5/6黄褐色シルトの混土（6：1：1）
粘性弱・しまり中 バミス3%
- 2 10R3/1黒褐色シルト・10R3/2黒褐色シルトの混土（5：5） 粘性弱・しまり中
バミス5%
- 3 10R3/1黒褐色シルト・10R3/2黒褐色シルトの混土（5：5） 粘性弱・しまり中
バミス10%
- 4 10R3/2黒褐色シルト・10R3/1黒褐色シルトの混土（6：4） 粘性弱・しまり中
バミス5%
- 5 10R3/2黒褐色シルト・10R3/1黒褐色シルトの混土（7：3） 粘性弱・しまり中
バミス3%
- 6 10R1/3 にふぶく黒褐色 シルト 粘性弱・しまり中 バミス3%
- 7 10R3/3 黑褐色シルト・10R5/6黄褐色シルトの混土（7：3） 粘性弱・しまり中
バミス5%
- 8 10R3/2黒褐色シルト・10R3/3黒褐色シルト・10R3/1黒褐色シルトの混土（4：4：2）
粘性弱・しまり中 バミス10%
- 9 10R3/2黒褐色シルト・10R3/6黄褐色シルトの混土（7：3） 粘性弱・しまり中
バミス5%
- 10 10R1/6 黄褐色 シルト 粘性弱・しまり中 バミス10%
- 11 10R1/6 黄褐色シルト・10R3/2黒褐色シルトの混土（6：4） 粘性弱・しまり中
バミス5%
- 12 10R1/2黒褐色シルト・10R3/1黒褐色シルト・10R5/6黄褐色シルトの混土（6：3：1）
粘性弱・しまり中 バミス10%
- 13 10R3/3黒褐色シルト・10R5/6黄褐色シルトの混土（7：3） 粘性弱・しまり中
バミス5%
- 14 10R3/1 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中 バミス10%
- 15 10R3/1 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中 バミス1%
- 16 10R3/1 黑褐色 シルト・10R3/2黒褐色シルト・10R5/6黄褐色シルトの混土（6：3：1）
粘性弱・しまり中 バミス10%
- 17 10R3/2 黑褐色シルト・10R5/6黄褐色シルトの混土（7：3） 粘性弱・しまり中
バミス5%
- 18 10R1/2 黄褐色 シルト 粘性弱・しまり中 バミス5%
- 19 10R3/2 黑褐色シルト・10R3/1黒褐色シルトの混土（6：3：1）
粘性弱・しまり中 バミス10%
- 20 10R5/6 黄褐色 シルト 粘性弱・しまり中 バミス5%
- 21 10R1/2 黄褐色 シルト 粘性弱・しまり中 バミス5%
- 22 10R1/2黒褐色シルト・10R5/6黄褐色シルトの混土（6：4） 粘性弱・しまり中
バミス5%
- 23 10R3/1黒褐色シルト・10R5/4にふぶく黒褐色シルトの混土（9：1） 粘性弱・しまり中
バミス3%
- 24 10R1/2黒褐色シルト・10R5/6黄褐色シルトの混土（6：4） 粘性弱・しまり中
バミス5%
- 25 10R3/1 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中 バミス1%

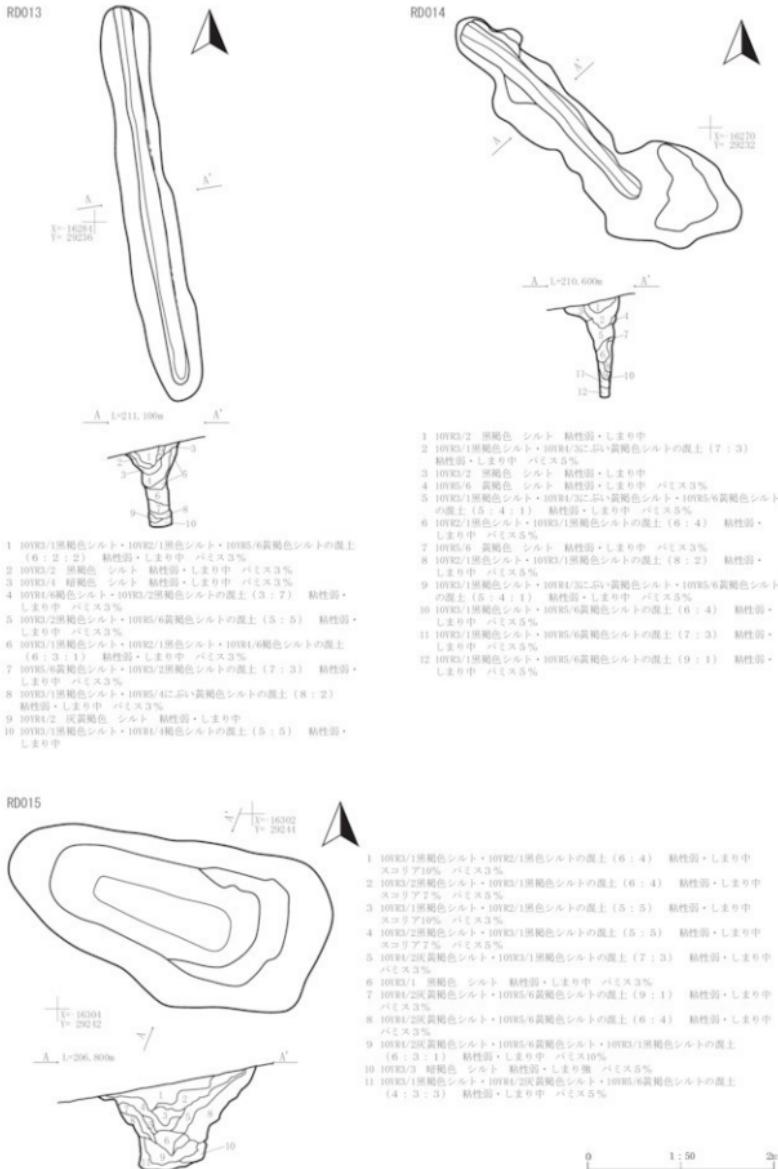
RD012

E=16278
Y=29222

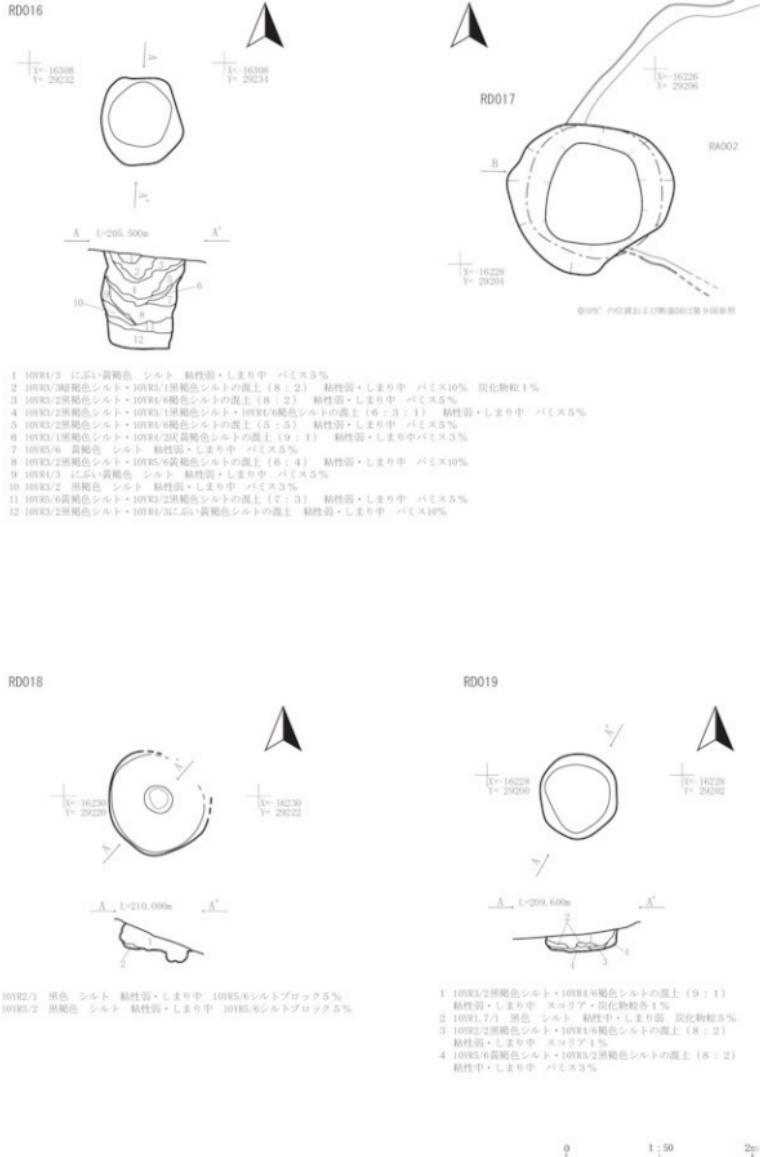
- 1 10R3/3黒褐色シルト・10R3/1黒褐色シルトの混土（6：4） 粘性弱・しまり中 バミス3%
- 2 10R2/2黒褐色シルト・10R3/2黒褐色シルトの混土（5：5） 粘性弱・しまり中 バミス3%
- 3 10R2/2黒褐色シルト・10R3/2黒褐色シルトの混土（6：4） 粘性弱・しまり中 バミス5%
- 4 10R1/2黒褐色シルト・10R4/2黒褐色シルトの混土（5：5） 粘性弱・しまり中
バミス1%
- 5 10R3/2 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中 バミス1%
- 6 10R4/2にふぶく黒褐色シルト・10R3/1黒褐色シルトの混土（7：3） 粘性弱・しまり中
バミス5%
- 7 10R3/2 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中 バミス10%
- 8 10R4/4黒褐色シルト・10R3/1 黑褐色シルトの混土（8：2） 粘性弱・しまり中 バミス3%
- 9 10R4/4 黑褐色シルト・10R3/1 黑褐色シルトの混土（7：3） 粘性弱・しまり中 バミス5%
- 10 10R2/2 黑褐色シルト・10R3/2 黑褐色シルト・10R4/4 黑褐色シルトの混土（6：4：1）
粘性弱・しまり中 バミス5%
- 11 10R3/2 黑褐色シルト・10R3/2 黑褐色シルトの混土（8：2） 粘性弱・しまり中 バミス5%
- 12 10R3/2 黑褐色シルト・10R4/2にふぶく 黑褐色シルトの混土（5：5） 粘性弱・しまり中
バミス5%
- 13 10R5/6 黑褐色 シルト・10R3/2 黑褐色シルトの混土（6：4） 粘性弱・しまり中 バミス1%
- 14 10R3/2 黑褐色 シルト・10R3/2 黑褐色シルトの混土（8：2） 粘性弱・しまり中 バミス5%
- 15 10R4/6 黑褐色 シルト・10R4/2 黄褐色 シルトの混土（6：4） 粘性弱・しまり中 バミス5%
- 16 10R3/3 黑褐色 シルト・10R3/2 黄褐色 シルトの混土（6：3：1） 粘性弱・しまり中
バミス5%
- 17 10R3/1 黑褐色 シルト・10R3/2 黑褐色シルト・10R4/4 黑褐色シルトの混土（8：1：1）
粘性弱・しまり中 バミス5%
- 18 10R2/2 黑褐色 シルト・10R3/2 黑褐色シルト・10R4/6 黑褐色シルトの混土（6：3：1）
粘性弱・しまり中 バミス5%
- 19 10R3/1 黑褐色 シルト・10R4/4 黑褐色シルトの混土（8：2） 粘性弱・しまり中 バミス3%
- 20 10R4/2にふぶく 黑褐色 シルト・10R3/2 黑褐色 シルトの混土（7：3） 粘性弱・しまり中
バミス5%
- 21 10R3/3 黑褐色 シルト・10R3/2 黑褐色シルトの混土（8：2） 粘性弱・しまり中 バミス5%

0 1:50 2m

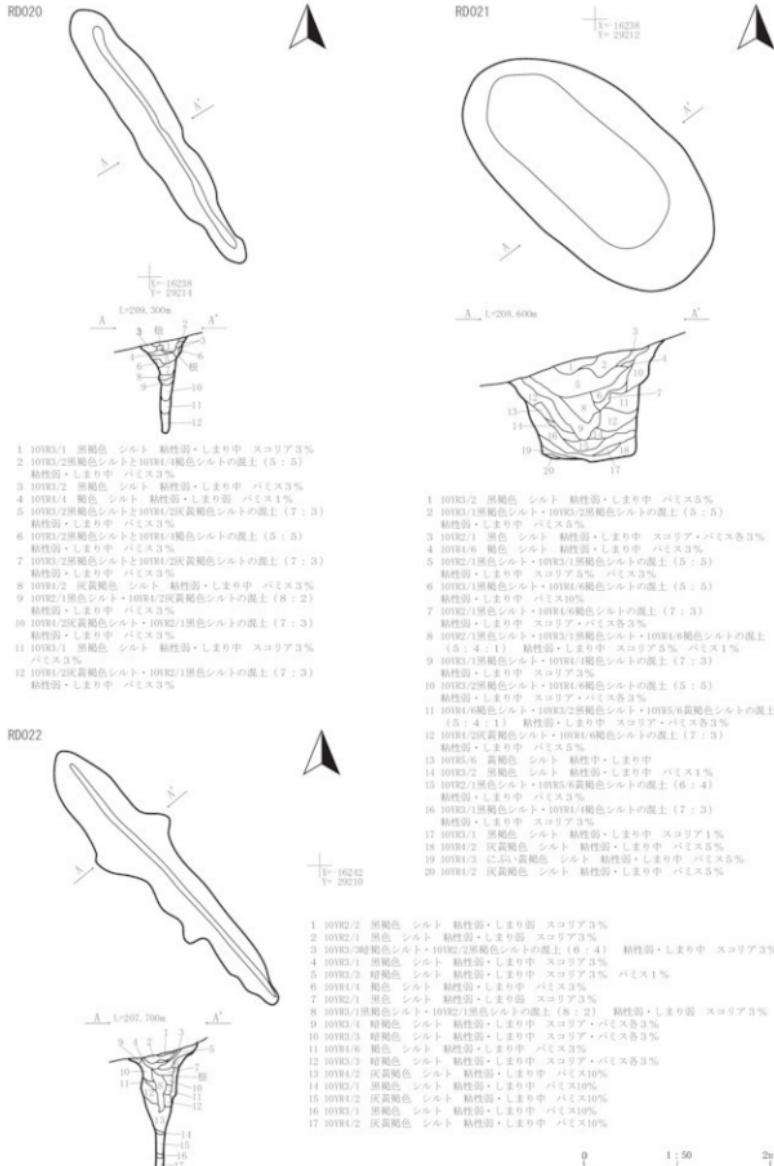
第15図 RD011・012 土坑



第16図 RD013～015 土坑

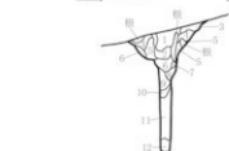
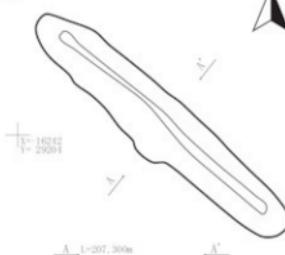


第17図 RD016～019 土坑



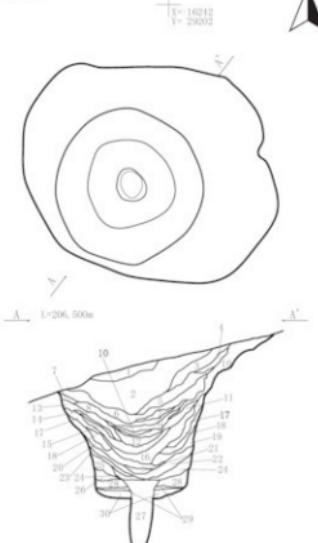
第18図 RD020 ~ 022 土壌

RD023



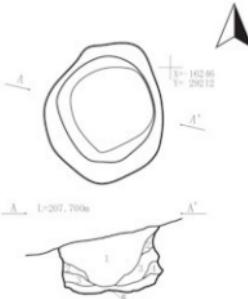
- 1 10YR1/1 黑色 シルト 粘性弱・しまり中 スコリア1%
- 2 10YR1/1 黄褐色 シルト 粘性弱・しまり中 スコリア1%
- 3 10YR1/2 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中 スコリア1%
- 4 10YR1/2 こぶし 黄褐色 シルト 粘性弱・しまり中 バミス1%
- 5 10YR1/2黒褐色シルト・10YR1/6褐色シルトの混土 (6 : 4) 粘性弱・しまり中 バミス3%
- 6 10YR1/2黒褐色シルト・10YR1/6褐色シルトの混土 (9 : 1) 粘性弱・しまり中 スコリア1%
- 7 10YR1/1 黄褐色 シルト 粘性弱・しまり中 スコリア1%
- 8 10YR1/2黒褐色シルト・10YR1/6褐色シルト・10YR1/6褐色シルトの混土 (8 : 1 : 1) 粘性弱・しまり中 バミス3%
- 9 10YR1/1 黑色 シルト 粘性弱・しまり中 スコリア1%
- 10 10YR1/2黒褐色シルト・10YR1/1黑色シルト・10YR1/6褐色シルトの混土 (5 : 3 : 2) 粘性弱・しまり中 スコリア1%
- 11 10YR1/1黑色シルト・10YR1/6褐色シルト・10YR1/2黒褐色シルトの混土 (5 : 3 : 2) 粘性弱・しまり中 バミス3%
- 12 10YR1/2黒褐色シルト・10YR2/1黑色シルト・10YR1/6褐色シルトの混土 (5 : 3 : 2) 粘性弱・しまり中 スコリア1%

RD025



- 1 10YR1/1 黑褐色 シルト 粘性中・しまり中 スコリア・バミス各3%
- 2 10YR1/1 黄褐色 シルト 粘性中・しまり中 スコリア・バミス各3%
- 3 10YR1/2 黑褐色 シルト 粘性中・しまり中 スコリア・バミス各3%
- 4 10YR1/3 黄褐色 シルト 粘性中・しまり中 スコリア・バミス各3%
- 5 10YR1/1 黑褐色 シルト 粘性中・しまり中 スコリア・バミス各3%
- 6 10YR1/1.5 黑褐色 シルト 粘性中・しまり中 スコリア1%
- 7 10YR1/2黒褐色シルト・10YR1/1.5 黄褐色シルトの混土 (7 : 3) 粘性中・しまり中 バミス5%
- 8 10YR2/1 黑色 シルト 粘性中・しまり中 スコリア・バミス各3%
- 9 10YR2/1 黑色 シルト・10YR1/2 黄褐色シルトの混土 (7 : 3) 粘性中・しまり中 スコリア・バミス各3%
- 10 10YR1/2黒褐色シルト・10YR1/6黄褐色シルトの混土 (7 : 3) 粘性中・しまり中 バミス3%
- 11 10YR2/1 黑色 シルト 粘性中・しまり中 スコリア・バミス各3%
- 12 10YR1/2 黄褐色シルト・10YR1/6黑褐色シルトの混土 (7 : 3) 粘性中・しまり中 バミス3%
- 13 10YR1/2 黑褐色シルト・10YR1/6 黄褐色シルトの混土 (5 : 5) 粘性中・しまり中 バミス3%
- 14 10YR1/2 黑褐色シルト・10YR1/6 黄褐色シルトの混土 (6 : 4) 粘性中・しまり中 バミス3%
- 15 10YR1/2 黄褐色シルト・10YR1/1 黑褐色シルトの混土 (7 : 3) 粘性中・しまり中 バミス5%
- 16 10YR2/1 黑褐色シルト・10YR1/2 黄褐色シルトの混土 (7 : 3) 粘性中・しまり中 バミス5%
- 17 10YR1/2 黄褐色シルト・10YR1/1 黑褐色シルトの混土 (7 : 3) 粘性中・しまり中 バミス5%
- 18 10YR2/1 黑色 シルト 粘性中・しまり中 スコリア・バミス各3%
- 19 10YR1/2 黄褐色シルト・10YR1/1 黑褐色シルトの混土 (7 : 3) 粘性中・しまり中 バミス3%
- 20 10YR1/2 黄褐色シルト・10YR1/2 黄褐色シルトの混土 (7 : 3) 粘性中・しまり中 バミス3%
- 21 10YR1/2 黄褐色シルト・10YR1/1 黑褐色シルトの混土 (7 : 3) 粘性中・しまり中 バミス3%
- 22 10YR1/2 黄褐色シルト・10YR1/1 黑褐色シルトの混土 (7 : 3) 粘性中・しまり中 バミス3%
- 23 10YR2/1 黑色 シルト 粘性中・しまり中 スコリア・バミス各3%
- 24 10YR1/2 黄褐色シルト・10YR1/6 黄褐色シルトの混土 (8 : 2) 粘性中・しまり中 バミス3%
- 25 10YR5.5 黄褐色 シルト 粘性中・しまり中 バミス5%
- 26 10YR1/2 黑褐色 シルト 粘性中・しまり中 スコリア・バミス各3%
- 27 10YR1/2 黄褐色シルト・10YR1/3(1/2) 黄褐色シルトの混土 (5 : 5) 粘性中・しまり中 スコリア・バミス各3%
- 28 10YR1/1 黄褐色 シルト 粘性中・しまり中 スコリア・バミス各3%
- 29 10YR4/2 黄褐色 シルト 粘性中・しまり中 バミス5%

RD024

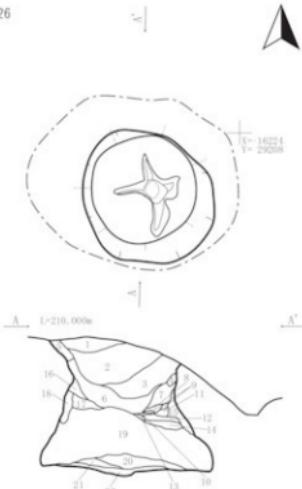


- 1 10YR1/1 黑色 シルト 粘性弱・しまり弱 10YR5.6シルトブロック5%
- 2 10YR1.7/1 黑色シルト・10YR3/2黒褐色シルトの混土 (8 : 2) 粘性弱・しまり弱 スコリア3% バミス1%
- 3 10YR2/1 黑色 シルト 粘性弱・しまり弱 10YR5.6シルトブロック5%
- 4 10YR1/1 黑色シルト・10YR5.6黄褐色シルトの混土 (6 : 4) 粘性弱・しまり弱 スコリア3%
- 5 10YR1/1 黑色 シルト 粘性弱・しまり弱 10YR5.6シルトブロック5% スコリア3% バミス1%

0 1 : 50 2m

第19図 RD023～025 土坑

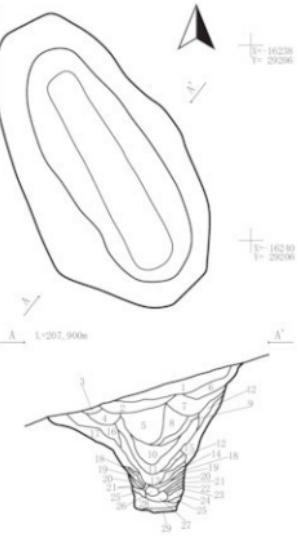
RD026



1 HVR2/2暗褐色シルト・10V3/2黒褐色シルトの混土（6 : 4）

- 粘性弱・しまり中・スコリアア%・炭化物5%
2 HVR2/1黒色シルト・10V3/2暗褐色シルト・10V5/4に似る黄褐色シルトの混土
(6 : 3 : 1) 粘性弱・しまり中・スコリア5%
3 HVR2/1黒色シルト・10V3/2暗褐色シルト・10V5/4に似る黄褐色シルトの混土
(7 : 2 : 1) 粘性弱・しまり中・スコリア5%
4 10V3/2 黒褐色 シルト 粘性弱・しまり中・スコリア3%
5 10V4/2 黄褐色シルト・10V5/4に似る黄褐色シルトの混土 (7 : 3)
粘性弱・しまり中・スコリア3%
6 10V3/2 黑褐色シルト・10V2/1褐色シルト・10V5/4に似る黄褐色シルトの混土
(6 : 2 : 1) 粘性弱・しまり中・スコリア3%
7 10V4/2 黄褐色シルト・10V3/2 黑褐色シルトの混土
(7 : 2 : 1) 粘性弱・しまり中・バニス3%
8 10V3/2 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中
9 10V5/5 黄褐色 シルト 粘性弱・しまり中
10 10V2/1 黑色 シルト 粘性弱・しまり中
11 10V4/1 褐色 シルト 粘性弱・しまり中・バニス3%
12 10V3/1 2次黄褐色シルト・10V5/4に似る黄褐色シルトの混土 (7 : 3)
粘性弱・しまり中・スコリア3%
13 10V2/1 黑色シルト・10V3/2暗褐色シルトの混土 (5 : 5)
粘性弱・しまり中・バニス3%
14 10V4/1 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中・バニス3%
15 10V3/2 2次黄褐色シルト・10V5/4に似る黄褐色シルトの混土 (8 : 2)
粘性弱・しまり中・バニス3%
16 10V3/3 嫩褐色 シルト 粘性弱・しまり中・バニス3%
17 10V4/1 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中・バニス3%
18 10V4/2 从黃褐色 シルト 粘性弱・しまり中・バニス5%
19 10V4/1 黄褐色 シルト 粘性弱・しまり中・バニス5%
20 10V5/2 黄褐色シルト 粘性弱・しまり中・バニス10%
21 10V4/1 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中・炭化物5%・バニス3%
22 10V3/1 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中・炭化物5%・バニス3%

RD027



- 1 10V3/1 黑褐色シルト・10V3/3暗褐色シルトの混土 粘性弱・しまり中・スコリア3%・バニス3%
2 10V2/1 黒色 シルト 粘性弱・しまり中・スコリア5%
3 10V3/1 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中・スコリア3%
4 10V3/5 黄褐色シルト・10V2/1黑色シルトの混土 (6 : 4)
粘性弱・しまり中・バニス3%
5 10V2/1 黑色 シルト 粘性弱・しまり中・スコリア5%・バニス1%
6 10V3/4 2次黒褐色シルト・10V3/2黒褐色シルトの混土 (6 : 4)
粘性弱・しまり中・バニス3%
7 10V3/2 黄褐色シルト・10V2/2暗褐色シルトの混土 (7 : 3)
粘性弱・しまり中・バニス3%・スコリア3%
8 10V2/2 黑褐色シルト・10V3/2 黑褐色シルトの混土 (6 : 4)
粘性弱・しまり中・バニス3%
9 10V3/2 黑褐色シルト・10V4/1褐色シルトの混土 (5 : 5)
粘性弱・しまり中・バニス3%
10 10V3/2 黑褐色シルト・10V2/1黑色シルト・10V5/4に似る黄褐色シルトの混土
(5 : 5 : 1) 粘性弱・しまり中・バニス3%
11 10V3/2 黑褐色シルト・10V2/1黑色シルト・10V5/6暗褐色シルトの混土 (8 : 2)
粘性弱・しまり中・バニス3%
12 10V3/2 黄褐色シルト・10V5/6暗褐色シルトの混土 (8 : 2)
粘性弱・しまり中
13 10V3/2 黑褐色シルト・10V3/1黑色シルトの混土 (8 : 2)
粘性弱・しまり中
14 10V3/2/4 暗黄褐色シルト・10V5/6暗褐色シルトの混土 (8 : 2)
粘性弱・しまり中
15 10V3/2 黄褐色シルト・10V5/6暗褐色シルトの混土 (5 : 5)
粘性弱・しまり中・バニス3%
16 10V3/2 黄褐色シルト・10V5/6暗褐色シルトの混土 (7 : 3)
粘性弱・しまり中
17 10V3/5 黄褐色シルト・10V2/2暗褐色シルトの混土 (7 : 3)
粘性弱・しまり中・バニス3%
18 10V2/1 黑色 シルト 粘性弱・しまり中
19 10V3/5 黄褐色 シルト 粘性弱・しまり中・バニス3%
20 10V2/2 黑色シルト・10V3/2暗褐色シルトの混土 粘性弱・しまり中
・バニス3%
21 10V3/5 黄褐色 シルト 粘性弱・しまり中・バニス3%
22 10V3/2 黑褐色シルト・10V3/2暗褐色シルトの混土 粘性弱・しまり中
・スコリア3%
23 10V2/1 黑色 シルト 粘性弱・しまり中
24 10V3/5 暗褐色シルト・10V3/2 黑褐色シルトの混土 (7 : 3)
粘性弱・しまり中・バニス3%
25 10V2/1 黑色 シルト 粘性弱・しまり中
26 10V3/6 に似る黄褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり中
27 10V3/5 黄褐色 シルト 粘性弱・しまり中
28 10V3/4 暗黄褐色シルト・10V5/6暗褐色シルトの混土 (9 : 1)
粘性弱・しまり中・バニス3%
29 10V3/5 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中

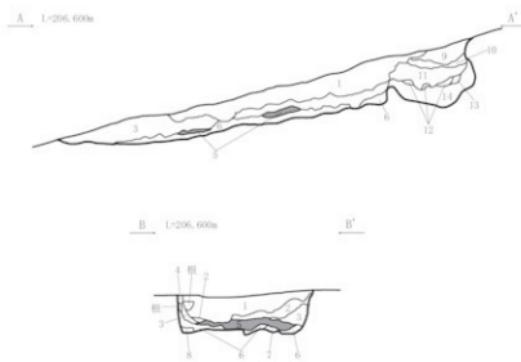
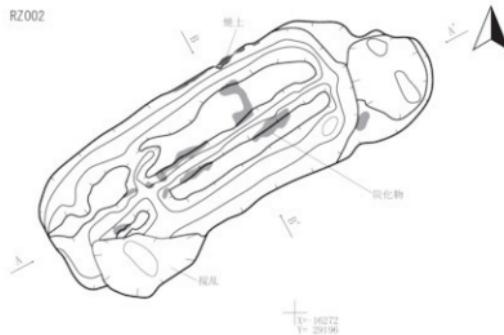
RD028



- 1 10V5/6 黄褐色 シルト 粘性中・しまり強 基盤強5%
2 10V4/2暗褐色シルト・10V3/1黑褐色シルトの混土 (4 : 4)
3 10V4/2 暗褐色 シルト 粘性中・しまり強 基盤強10%
4 10V3/1 黑褐色 シルト 粘性中・しまり強 基盤強3%
5 10V1/1 黑灰色 シルト 粘性中・しまり強 基盤強5%
6 10V3/1 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり強

粘性中・しまり強 基盤強5%

第20図 RD026 ~ 028 土壌



- 1 10R2/1 黄色 シルト 粘性弱・しまり中 10R3/2シルト7%、スコリア・炭化物粒各1%
- 2 10R3/2 黒褐色 シルト 粘性弱・しまり中、スコリア・炭化物粒各1%
- 3 10R2/1 黄色 シルト 粘性弱・しまり中 10R5/6シルト粒3%
- 4 10R3/3 耐褐色 シルト 粘性弱・しまり弱
- 5 10R2/1 黄色 シルト 粘性弱・しまり中 炭化物粒30% 10R5/6シルト粒3%
- 6 10R3/7.1 黒色 シルト 粘性弱・しまり弱 炭化物粒10%
- 7 10R3/1 淡褐色 シルト 粘性弱・しまり弱
- 8 10R3/1 にい葉層付 粘性シルト 粘性中・しまり中
- 9 10R2/1 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中
- 10 10R2/1.5 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中
- 11 10R3/2 黑褐色 ハイト 粘性弱・しまり中
- 12 5R3/6壁赤褐色シルト(壁上) + 10R2/1黒色シルトの混上 粘性弱・しまり中
- 13 10R3/2 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中
- 14 10R3/4 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中

0 1 : 50 2m

第21図 RZ002 炭窯

V 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器が約7.1kg (42×32×30cm³コンテナ換算約1箱)、石器が48点・約12.5kg (42×32×20cm³コンテナ換算約1箱) である。以下、図の掲載方法について述べておく。

掲載基準

Ⅲ章2節(2)「遺物整理の方法と掲載基準」を参照のこと。

掲載順序

遺物種別で分類し、縄文土器→石器の順に掲載することとした。両種別内における掲載順は、IV章「検出遺構」の記載順である。

記述方法

個々の遺物についての記述は、各種別とも遺物観察表(属性表)にて行っている。これに加え、本章にて代表的・特徴的な遺物を抽出し、補足的に記述を行う。

1 縄文土器(第22~24図、第4表、写真図版15・16)

(1) 概要

出土総重量は7,069.4gである。各遺構における出土量は前章に記載のとおりである。時期は後期初頭主体である。

掲載遺物の選択方法について、部分的でも径が復元されたもの、口縁部片、底部片はそれぞれすべて掲載した。ただし遺構内出土資料についてはこの限りではなく、胴部破片資料も載せている。掲載個体・点数および重量は、33個体・38点である。

(2) 各資料の特徴

掲載順に記述する。

竪穴住居(RA)

1はRA001内P10埋土の深鉢口縁部である。器形は内湾する。口唇は水平でなく、波状を呈する可能性がある。胴部内面には縦位のミガキが施される。内面のみ被熱による剥落が顕著に確認されう。2~5はRA002出土である。2は埋設土器で、地文は撚りが粗い。内面全体に被熱による剥落が顕著に確認される。3・4は床面直上出土である。3は折り返し口縁で、直径約5mmの円形竹管文が10~15mm程度の間隔で数列施されている。4はLRの押圧縄文で山形状?の文様が描かれている。5は口唇が平坦で外面に飛び出す。6~12はRA003出土である。6は口縁が内湾する深鉢で、部位によりLR原体の施文方法と方向を変えている。口縁部にはU字状に押圧縄文を配し、部分的に横位回転施文される。胴~底部は縦位回転である。竪穴住居内出土資料に関して、胴部への地文施文状況がわかるものはすべて縦位回転であり、これが特徴といえる。

土坑(RD)

13はRD013付近出土である。本遺跡出土品中唯一、地文に単軸絡条体第1類が使用されている。RD017出土の15は並行沈線で構成される文様が、RD019出土の17は山形口縁を呈する器形が特徴的であるが、何れも細片のため詳細不明である。地文のみの個体に共通する特徴として、横位回転する

ものがないことが挙げられる。

遺構外

20は堅穴住居群南方の斜面中からまとめて出土した。山形口縁を呈し、口縁部から胴部上位には入組沈線や並行沈線が施される。型式的に十腰内I式直前に比定される。胴部中位以下の地文施文方向は縦位である。23は弧状沈線が施される深鉢で、破片であるため詳細型式の判断がつかないが、中期末から後期初頭の特徴を有する。24は区画沈線と磨消により構成される後期の鉢片である。25は口唇が先細り内湾する器形で、頸部付近にはB突起が施される。地文の施文方向は、胴部上半は横位であるが下半は斜位回転で、文様にアクセントをついている。晩期・大洞C 2～A式相当か。

2 石器・石製品（第25～27図、第5表、写真図版17・18）

（1）概 要

石器の出土総数・総重量は46点・12,529.1gである。器種内訳は、石鎌2点、石匙1点、削器5点、微細剥離ある剥片1点、石核1点、剥片18点（うち14点は疊石器剥片）、敲石2点、凹石類5点、磨石1点、砥石？1点、台石類6点、棒状疊1点、穿孔疊1点、石器素材1点である。

なお、本報告では23点・10,976.3gを掲載した。以下、器種ごとに記述する。

（2）各資料の特徴

石鎌

R A002床面、R D017埋土から各1点ずつ計2点出土した（36、48）。2点とも凹基無茎（鈴木1991）である。48は黒曜石製で、産地同定を行ったが被熱のため不明との結果が示されている（明治大学杉原重夫氏他の分析による）。

石匙

R A002埋土から1点出土した（41）。いわゆる縦型石匙に分類され、先端の尖化を目的とした調整がなされており尖頭状石匙に細分される。調整は片面のみである。

削器

一側縁の1/2以上に刃部調整の施されているもので、刃部角が45°以下のものを削器とした。R A 003埋土から2点、R D017埋土から1点、遺構外IV層から2点の計5点出土している（44、45、49、52、53）。R A003出土の44・45は、いずれも刃部1箇所・片面調整・黒色頁岩製である。52は形状から判断して石匙欠損品の可能性がある。

微細剥離ある剥片

遺構外IV層から1点出土した（54）。両面調整石器（尖頭器？）の調整剥片に似た形状を呈する。石質はめのうである。

石核

遺構外IV層から1点出土した（55）。厚手に剥離された剥片を石核に転用したものである。打面、作業面とともに1面で、通常剥離がなされている。石質は頁岩である。

敲石

R A002内炉跡とR D019埋土から各1点ずつ計2点出土した（37・50）。前者は石器として利用されたのち、炉構築材に転用されたものと思われる。長軸端のほか、側縁にも敲打痕が顕著に確認される。後者は長軸端一方が使用され、平坦化している。

凹石類

R A002床面直上、R A003床面直上、R Z001埋土、遺構外Ⅳ層から各1点ずつ(38・42・46・56)、および出土地点不明の1点を合わせて計5点出土している。38は片面に、42・46・56は両面に敲打による凹みが見られる。なお、38は凹みの周間に磨痕も確認される。

磨石

R Z001埋土から1点出土した(47)。両面に磨痕が顕著に確認される。

砥石?

R D026埋土から1点出土した(51)。長さ1~2cm程度の直線で断面V字形の抉れが数か所確認される。

台石類

R A001内炉跡およびR A002内炉跡から各2点、R A003床面から1点、遺構外Ⅳ層から1点の6点出土し、うち4点を掲載した(34・39・40・43)。いずれも扁平疊で、敲打を受けた痕跡を有する。堅穴住居炉跡出土の34・39・40は、いずれも石器として使用後に転用されたものである。34は台石時の欠損の可能性があるが、39・40は炉構築材として意図的に打ち欠かれたものと思われる。

棒状礫

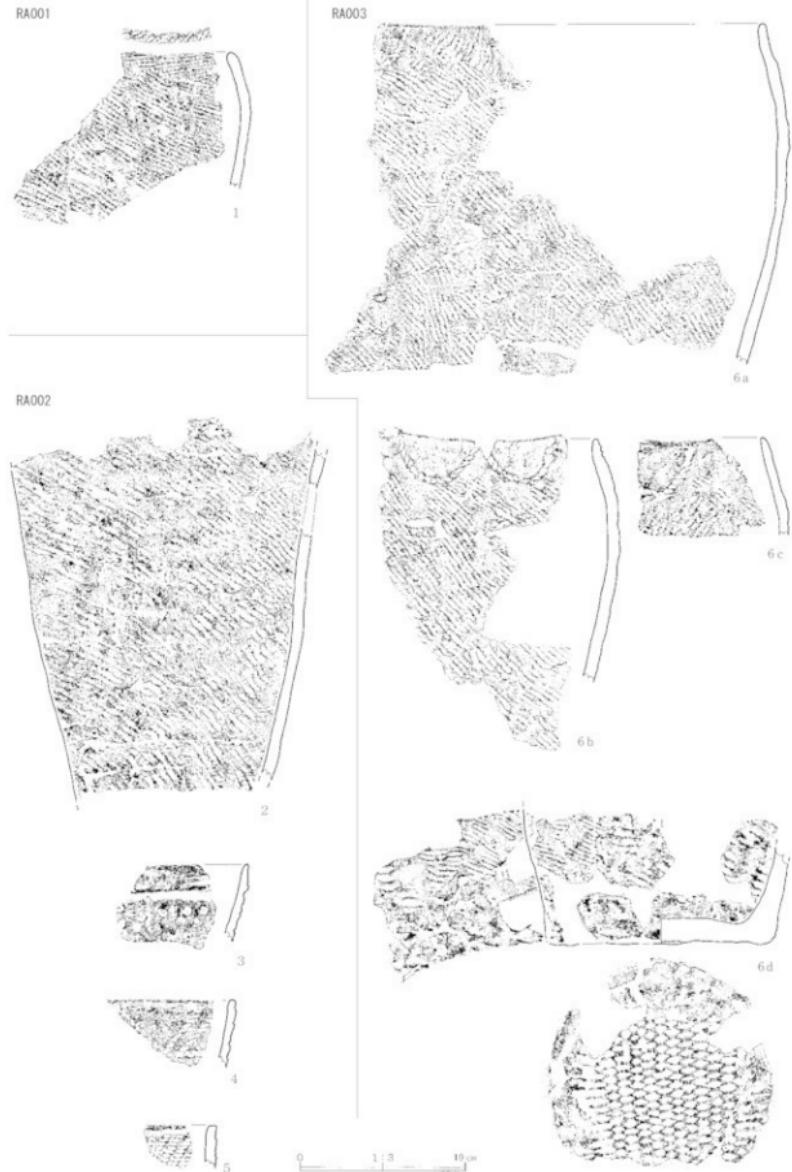
R Z001埋土から1点出土した。長さ12cm・直径5cm程度、重量307.2gの長細い疊で、石核石器もしくは疊塊石器素材と考えられる。石質は砂岩である。

穿孔礫

R A001内炉跡から1点出土した(35)。直径約1cmの穿孔痕があるが、約半分は欠損している。欠損後、炉構成材に転用されたものと思われる。

石器素材

R A003床面直上から1点出土した。大きさ約7cm、重量173.7gの亜角疊で、石質はチャートである。チャート製の石器は敲石に見られることから、その素材である可能性が考えられる。



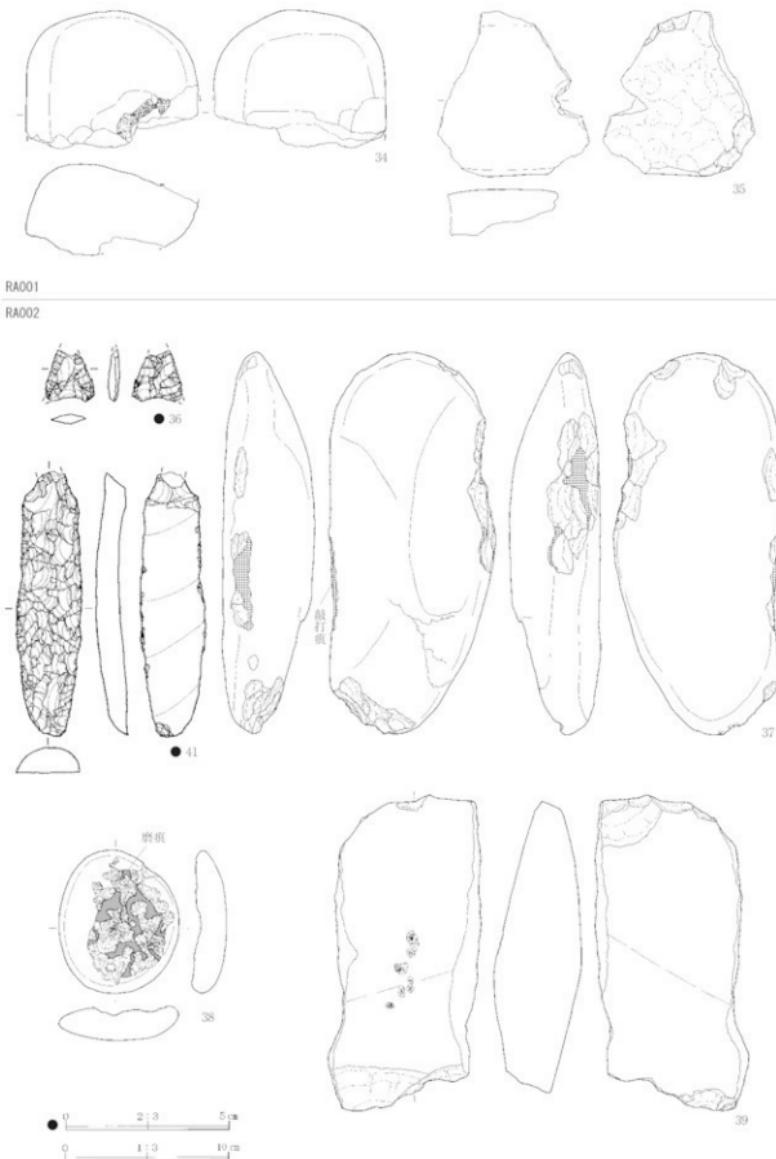
第22図 壁穴住居出土土器



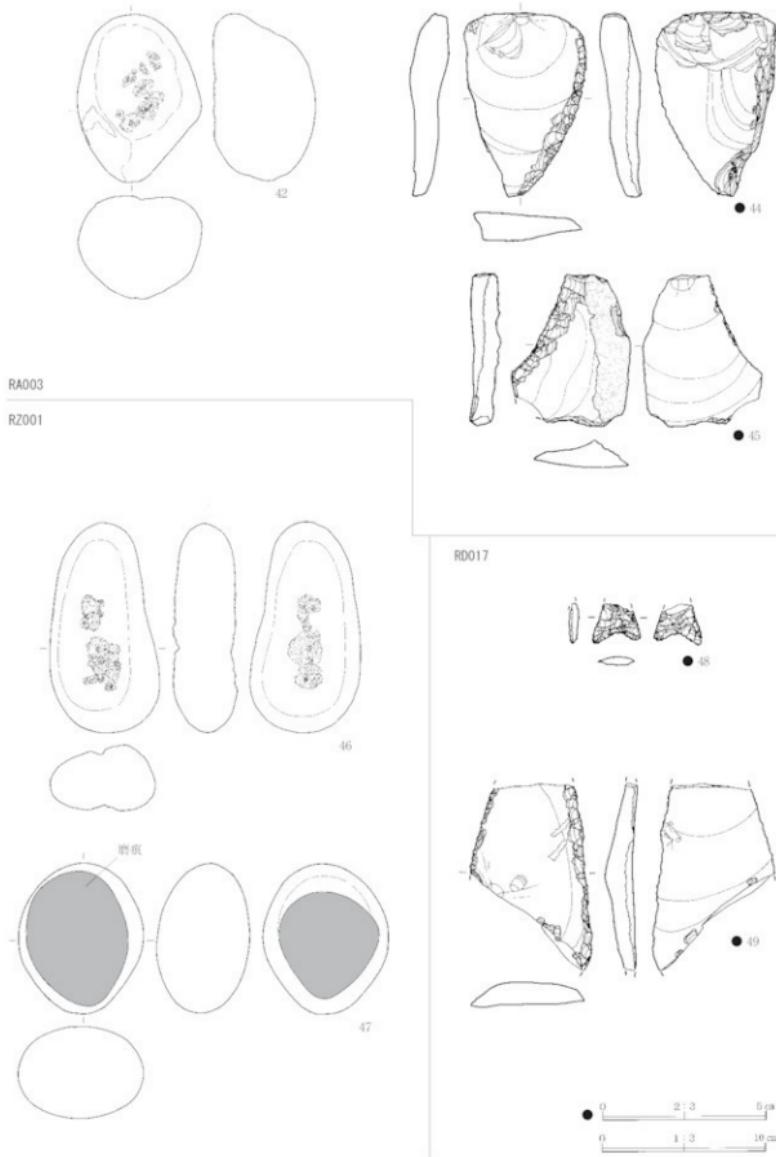
第23図 積穴住居・土坑・遺構外出土土器



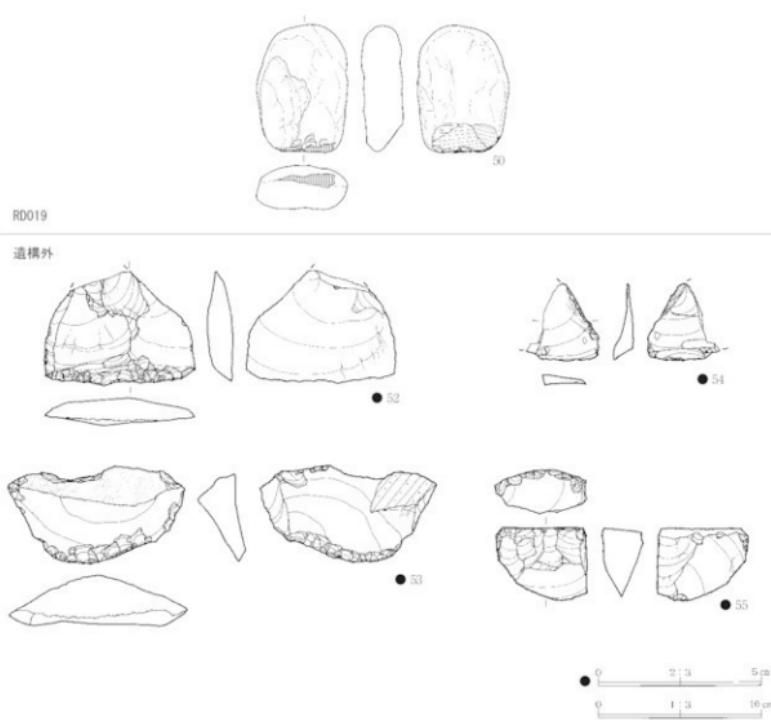
第24図 遺構外出土土器



第25図 積穴住居出土石器



第26図 壁穴住居・石器埋納遺構・土坑出土石器



第27図 土坑・遺構外出土石器

第4表 土器観察表

No.	出土地点・層位	器種	残存部位	文様・調整の特徴	織文原体と施文方向	備考
掲載 国版 写図						
1 22 15 RA001 P10埋土	深鉢	口縁	地文口唇にも、内面胴部縦位ミガキ。	LR・口縁斜位、胴縦位	内面被熱剥落顯著。	
2 22 15 RA002理設土器	深鉢	胴	地文粗い、	LR・縦位	内面被熱剥落顯著。	
3 22 15 RA002床面直上	鉢類	口縁	折り返し口縁。口縁直下に数列の円形竹管刺突。			
4 22 15 RA002床面直上	深鉢	口縁	押圧纏文で山形状のモチーフ。	LR		
5 22 15 RA002埋土	鉢類	口縁	口唇平坦。	LR・縦位		
6a RA003埋土			口縁～胴			
6b RA003埋土			口縁～胴			
6c RA003埋土	深鉢		口縁	口縁に押圧纏文でU字状のモチーフ。底面に網代紋。内面全体縦位ミガキ。	LR・口縁横位、胴縦位	
6d RA003埋土、RD017埋土			胴～底			
7 23 15 RA003埋土	深鉢	口縁	口縁上部無文、内面多方向ミガキ。	LR・縦位		
8 23 15 RA003埋土	鉢類	口縁		LR・縦位	海綿骨針多量。	
9 23 15 RA003埋土	深鉢	口縁	地文粗い、内面縦位ミガキ。	LR・縦位		
10 23 15 RA003埋土	深鉢	口縁		LR・横位	磨減著しい。	
11 23 15 RA003埋土	深鉢	胴	内面縦位ミガキ。	LR・縦位、部分的に不整		
12 23 15 RA003埋土	小型	底	全面ミガキ、外面は縦位。			
13 23 16 RD013北側IV層	深鉢	胴			単軸線1類・斜位	
14 23 16 RD017埋土	深鉢	胴	内面縦位ミガキ。	LR・斜位	円盤状土製品？	
15 23 16 RD017埋土	不明	胴	並行沈線。			
16 23 16 RD017埋土	深鉢	胴	内面縦位ミガキ。	LR・縦位		
17 23 16 RD019埋土	鉢類	口縁	山形口縁、押圧纏文？。	LR?		
18 23 16 RD020埋土	深鉢	胴	内面縦位ミガキ。	RL・縦位		
19 23 16 遺構外IV層 X=16229 Y=29308	深鉢	胴	内面縦位ミガキ。	RL・縦位		
20a 遺構外IV層		口	—山形口縁、口縁～胴部上位は入組・並行沈線。胴部中位以下地文、底面網代痕。			
20b 24 16 遺構外IV層 X=16224 Y=29309	深鉢	胴	—内面縦位ミガキ。	RL・縦位		
20c 遺構外IV層		底				
21 24 16 遺構外IV層 X=16231 Y=29209	深鉢	胴	原体縦かん。	RL・横位		
22 23 16 遺構外IV層 X=16225 Y=29212	深鉢	胴	並行隆帯+円形竹管刺突(2条)。	LR・縦位		
23 23 16 遺構外IV層 X=16225 Y=29110	深鉢	胴	弧状沈線。	RL・縦位		
24 23 16 遺構外IV層 X=16230 Y=29240	鉢類	胴	弧状沈線区画、磨消、内面縦位ミガキ。	RL・横位		
25 23 16 遺構外IV層 X=16212 Y=29213	鉢類	口縁	口縁斜位刻目、並行沈線、B突起、胴部地文。	LR・横位、斜位		
26 23 16 遺構外IV層 X=16229 Y=29110	深鉢	口縁	横位並行沈線。			
27 23 16 遺構外IV層 X=16229 Y=29116	深鉢	口縁	口唇平坦。口縁上部無文、地文粗い。	LR・縦位		
28 23 16 遺構外IV層 X=16230 Y=29117	鉢類	口縁		LR・縦位		
29 23 16 遺構外IV層 X=16211 Y=29213	深鉢	口縁	無文。			
30 23 16 遺構外IV層 X=16218 Y=29116	深鉢	口縁	地文口唇にも、口縁横位磨消。	LR・横位		
31 23 16 遺構外IV層 X=16215 Y=29113	深鉢	胴	縦位沈線(多)			
32 23 16 遺構外IV層 X=16217 Y=29109	深鉢	底	横位ナデ。			
33 23 16 遺構外IV層 X=16224 Y=29114	深鉢	底	横位ナデ。			

第5表 石器観察表

No.	出土地点	器種	特徴	石質	長さ	幅 (cm)	厚さ	重量 (g)
34	25 17 RA001砾石	台石		安山岩	10.20	9.30	2.80	276.7
35	25 17 RA001砾石6	穿孔機		安山岩	8.50	10.60	5.60	672.3
36	25 17 RA002灰面	石鏨	回基無茎,	頁岩	(1.60)	1.50	0.35	0.8
37	25 17 RA002砾石2	敲石		安山岩	23.50	10.30	5.65	1701.5
38	25 17 RA002灰面32	刮・磨石		安山岩	8.80	7.35	2.15	198.2
39	25 17 RA002砾石1	台石	打ち欠いて伊石に転用,	ダイサイト	19.45	9.40	5.35	1468.3
40	17 RA002砾石7	台石	打ち欠いて伊石に転用,	安山岩	(11.00)	(11.70)	5.20	887.5
41	25 17 RA002埋土	石鏨	尖頭状、片面調整,	頁岩	(8.05)	2.00	1.00	17.3
42	26 18 RA003灰面S1	回石		安山岩	10.40	7.60	6.35	572.6
43	18 RA003灰面S4	台石		安山岩	26.75	15.10	4.85	2859.9
44	26 18 RA003埋土	削器	左側斜背面側に調整,	黒色頁岩	5.60	3.70	1.20	24.0
45	26 18 RA003埋土	削器	左側斜背面側に調整,	黒色頁岩	4.70	3.60	0.95	11.6
46	26 18 RZ001 S1	回石	両面,	安山岩	12.90	6.80	4.05	494.3
47	26 18 RZ001 S3	磨石		安山岩	9.25	7.70	5.70	546.6
48	26 18 RD017埋土	石鏨	回基無茎,	黒耀石	(1.20)	1.50	0.30	0.4
49	26 18 RD017埋土	削器	両側斜背面側に調整、被熱,	珪質頁岩	(5.75)	(3.70)	0.95	14.9
50	27 18 RD019埋土	敲石		チャート	7.90	5.60	2.70	169.7
51	18 RD026埋土	砥石?	埋土中に埋納?,	砂岩	13.05	9.55	8.90	949.6
52	27 18 遺構外IV層 Y=16223 1=29216	削器(石鏨又損?)	末端部背面側に調整,	頁岩	(3.40)	4.60	0.85	11.9
53	27 18 遺構外IV層 Y=16228 1=29204	削器	末端部に両面調整,	頁岩	3.00	5.35	1.50	13.9
54	27 18 遺構外IV層 Y=16315 1=29240	微縫剥離ある刮片	左側斜背面側に微縫剥離,	めのう	2.30	(2.20)	0.60	1.9
55	27 18 遺構外IV層 Y=16228 1=29204	石核	1面・1方向,	頁岩	2.20	2.80	1.40	8.1
56	18 遺構外IV層 Y=16224 1=29206	回石	片面,	スコリア	—	—	—	74.2

VI 自然科学的分析

1 鶴飼遺跡の放射性炭素年代測定（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

（1）測定対象試料

鶴飼遺跡は、岩手県盛岡市玉山区渋民字鶴飼47-15に所在する。測定対象試料は、RD017 19層出土炭化物（TTRK-11-1 : IAAA-111851）、RD026 埋土最下層出土炭化物（TTRK-11-2 : IAAA-111852）、RZ002 6層出土炭化物（TTRK-11-3 : IAAA-111853）の合計3点である（表1）。

（2）測定の意義

TTRK-11-1、2の測定により、遺構廃絶時期の下限を明らかにする。TTRK-11-3は遺構の使用に関する炭化物と考えられ、この測定で遺構の使用時期を検討する。

（3）化学処理工程

- ① メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- ② 酸-アルカリ-酸（AAA : Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l (1M) の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- ③ 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- ④ 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- ⑤ 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- ⑥ グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（4）測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（5）算出方法

- ① $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- ② ¹⁴C年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として過る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。

ある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- ③ pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- ④ 暴年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暴年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の曆年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暴年較正年代を表す。暴年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暴年較正年代の計算に、IntCal09データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暴年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暴年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

(6) 測定結果

炭化物の ^{14}C 年代は、RD017 19層出土のTTRK-11-1が 3810 ± 30 yrBP、RD026 埋土最下層出土のTTRK-11-2が 3760 ± 30 yrBP、RZ002 6層出土のTTRK-11-3が 1000 ± 20 yrBPである。暴年較正年代 (1σ) は、TTRK-11-1が $2286 \sim 2205$ cal BCの範囲、TTRK-11-2が $2271 \sim 2138$ cal BCの間に2つの範囲、TTRK-11-3が $996 \sim 1033$ cal ADの間に2つの範囲で示される。TTRK-11-1、2が縄文時代後期前葉頃、TTRK-11-3が古代に相当する値となっている。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法 (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					Libby Age (yrBP)	pMC (%)	
IAAA-IIII851	TTRK-11-1	RD017 19層	炭化物	AaA	-24.16 ± 0.34	3,810 ± 30	62.24 ± 0.19
IAAA-IIII852	TTRK-11-2	RD026 埋土最下層	炭化物	AaA	-27.08 ± 0.34	3,760 ± 30	62.59 ± 0.21
IAAA-IIII853	TTRK-11-3	RZ002 6層	木炭	AAA	-25.31 ± 0.37	1,000 ± 20	88.25 ± 0.24

[#4734]

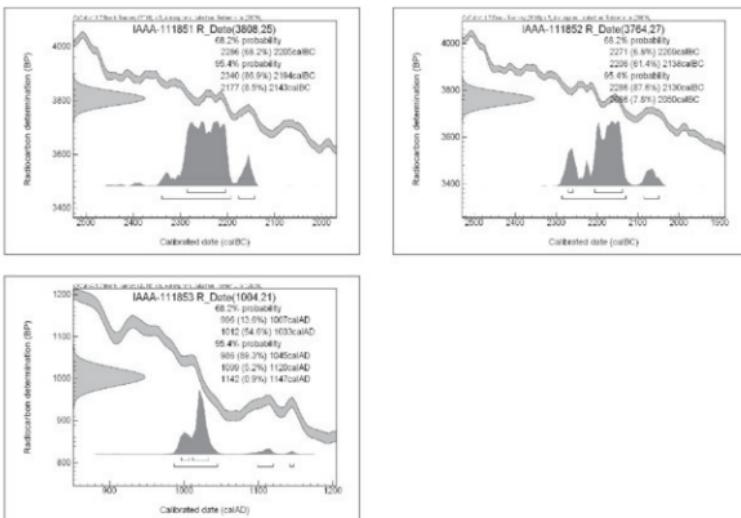
表2

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用(yrBP)	1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-II1851	$3,790 \pm 30$	62.35 ± 0.19	$3,808 \pm 25$	2286calBC - 2205calBC (68.2%) 2177calBC - 2143calBC (8.5%)	2340calBC - 2194calBC (86.9%) 2177calBC - 2143calBC (8.5%)
IAAA-II1852	$3,800 \pm 30$	62.32 ± 0.21	$3,764 \pm 27$	2271calBC - 2259calBC (6.8%) 2206calBC - 2138calBC (61.4%)	2286calBC - 2130calBC (87.6%) 2086calBC - 2050calBC (7.8%)
IAAA-II1853	$1,010 \pm 20$	88.19 ± 0.23	$1,004 \pm 21$	996calAD - 1007calAD (13.6%) 1012calAD - 1033calAD (54.6%)	986calAD - 1045calAD (89.2%) 1099calAD - 1120calAD (5.2%) 1142calAD - 1147calAD (0.9%)

[参考値]

文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363
 Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
 Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150



[参考]曆年較正年代グラフ

VII 総括

今回の発掘調査で明らかとなった鶴飼遺跡の遺構・遺物をまとめ、その特記事項を挙げて総括とする。

1 立地と遺構

(1) 立地

本遺跡は、北上川左（東）岸約500m、姫神山西麓の小起伏山地縁辺部に立地する。調査区内の微地形は、北側尾根部と南西向き斜面部で構成され、尾根部は幅5m弱とかなり狭い。斜面部には浅い谷筋が3条存在する。標高は203～215mで、調査前の状況は山林、畠地である。

(2) 遺構

今回の調査で検出された遺構は、以下のとおりである（第6図）。

縄文時代…堅穴住居4棟、堅穴住居状遺構1基、石器埋納遺構1基、土坑28基（フラスコ形2、円形14、溝形7、長楕円形5）
古代…炭窯1基

特記事項

- ・堅穴住居の平面形は、4m前後の円形基調を呈する。炉は方形基調の石圓炉が基本となり、住居中心からやや北東側に寄った地点に構築されるという特徴が見られる。使用時期は、出土土器から後期初頭と考えられる。堅穴の中心からずれる炉の形態は、中期末葉に盛行した複式炉の影響を残すものと推定され、これも後期初頭という時期比定の根拠となろう。なお、各住居は近接しており、すべてが同時存在とは考えにくい。詳細な前後関係は不明であるが、いずれ近接した時期の連続的な構築といえよう。
- ・フラスコ形土坑は、RA003堅穴住居廃絶後に構築されている。これ以外の住居使用時に構築された可能性（住居とフラスコ形土坑の併存）が想定される。他方、本遺跡の北方約2.2kmにある芋田沢田IV遺跡では堅穴住居の廃絶→フラスコ形土坑の構築という大きな時期変遷が看取されており、本遺跡もこの流れの中にはいった可能性が考えられる。いずれの可能性も否定できない。
- ・溝形土坑は、RD002の土層断面観察から堅穴住居構築面より上位から掘り込まれていることが判明した。よって、その構築時期は縄文時代後期初頭以降ということになる。
- ・遺構の立地に関して、縄文時代のものは種別ごとの立地差が看取される。堅穴住居は狹小な尾根部に並列する形で構築されていた。堅穴住居状遺構、石器埋納遺構、フラスコ形土坑も尾根上に立地する。一方、溝形土坑はすべて斜面部の谷筋底面に沿って構築されている。長楕円形土坑も溝形と類似する配置を示すが、同じ谷筋内でも底面ではなく法面に構築される特徴を有する。溝形土坑、長楕円形土坑ともにいわゆるTピットの範疇に含まれるものであるが、この形態差および立地差が何に起因するのかを考えたとき、①構築年代差に起因する、②機能が狩猟用の陥し穴であると仮定してその対象獣の違いに起因する、現段階ではこの二つが想定される。

なお、円形土坑の立地も基本的に溝形・長楕円形土坑と同様に斜面谷筋付近を示す。とくに、掘削深度の深いもの（1mを超えるもの）については陥し穴の可能性が考えられる。

- ・円形土坑のうち、R D005～008は弧状にはば等間隔（3～3.5m間隔）で配置されており、構築者の意図的な配置プランが垣間見られる。
- ・炭窯とした遺構は、斜面傾斜方向にのびる長方形を呈し、底面には3条の小溝が構築されている。底面直上に炭化物層が形成され、焼土は底面より側面に顕著に残存する。使用時期を示す人工遺物は出土していないが、炭化物の放射性炭素年代測定（AMS法）結果は10世紀末から11世紀前葉の値を示しており、その時期の可能性が高い。

2 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、以下のとおりである。

縄文土器・・・7,069.4g (42×32×30cm³コンテナ換算約1箱)

石 器・・・46点・12,529.1g (42×32×20cm³コンテナ換算約1箱)

器種内訳は、石鎚2点、石匙1点、削器5点、微細剝離ある剝片1点、石核1点、剝片18点（うち14点は疊石器剝片）、敲石2点、凹石類5点、磨石1点、砥石？1点、台石類6点、棒状疊1点、穿孔疊1点、石器素材1点である。

特記事項

- ・土器は、遺構内・外とともに縄文時代後期初頭のものが主体である。遺構外遺物の大半は、尾根上の居住域から流下したものと推定される。
- ・石器の製作時期も土器と同じく後期初頭主体と推定される。
- ・R Z001石器埋納遺構は、疊塊石器とその素材を保管対象としている点で注目に値する事象といえる。
- ・土器、石器いずれに関しても、今次調査区内での製作痕跡は確認されなかった。よって、当該域（居住域の形成された尾根上）はおもに使用の場であり、これら遺物は搬入品と考えてよからう。

引用・参考文献

草間俊一1956「岩手県日戸遺跡調査報告」『岩手大学学芸学部調査年報』第10巻第1部 岩手大学学芸学部

草間俊一1959「岩手県日戸遺跡調査報告(第2報)」『岩手大学学芸学部研究年報』第14巻第1部 岩手大学学芸学部

財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1998「才津沢遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第278集

財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999「芦名沢I遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第295集

財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2005「芋田II遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第457集

盛岡市教育委员会2008「延久保V遺跡」

写 真 図 版



調査区全景（西から）



基本層序（東から）

写真図版1 調査区全景、基本層序



RA001竪穴住居 平面（東から）



RA001竪穴住居 断面（東から）



RA001竪穴住居 炉平面（東から）



RA001竪穴住居 炉断面（南から）

写真図版2 RA001竪穴住居



RA002竪穴住居 平面（北から）



RA002竪穴住居 断面（東から）



RA002竪穴住居 埋設土器断面（南東から）



RA002竪穴住居 炉平面（北東から）



RA002竪穴住居 炉断面（東から）

写真図版3 RA002竪穴住居



RA003竪穴住居 平面（東から）



RA003竪穴住居 断面（南から）



RA003竪穴住居 炉平面（東から）



RA003竪穴住居 断面（東から）

写真図版 4 RA003竪穴住居



RA004堅穴住居 平面（北から）



RA004堅穴住居 断面（東から）



RA004堅穴住居 炉平面（北から）



RA004堅穴住居 炉断面（南東から）

写真図版 5 RA004堅穴住居



RE001堅穴住居状遺構 平面（南東から）



RE001堅穴住居状遺構 断面（東から）

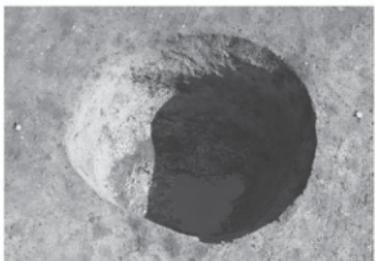


RZ001石器埋納遺構 平面（北から）



RZ001石器埋納遺構 断面（北から）

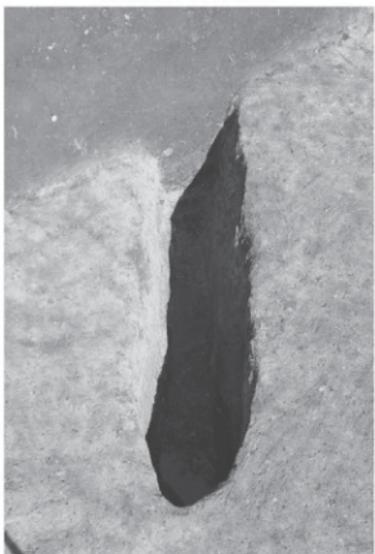
写真図版6 RE001堅穴住居状遺構、RZ001石器埋納遺構



RD001土坑 平面（南から）



RD001土坑 断面（南東から）



RD002土坑 平面（南東から）



RD003土坑 平面（南から）



RD003土坑 断面（南から）



RD004土坑 平面（南東から）



RD004土坑 断面（南東から）

写真図版7 RD001～004土坑



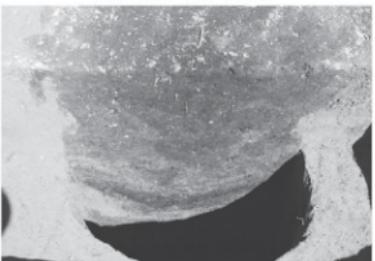
RD005土坑 平面（南から）



RD005土坑 断面（南から）



RD006土坑 平面（西から）



RD006土坑 断面（南から）



RD007土坑 平面（北東から）



RD007土坑 断面（南から）



RD008土坑 平面（南西から）



RD008土坑 断面（南から）

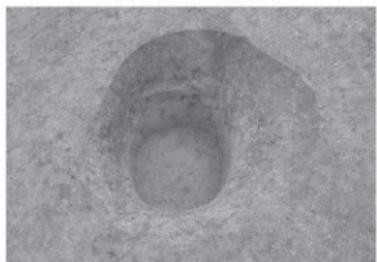
写真図版8 RD005~008土坑



RD009土坑 平面（東から）



RD009土坑 断面（北東から）



RD010土坑 平面（東から）



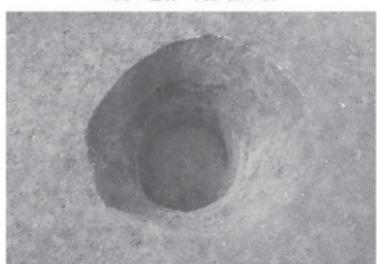
RD010土坑 断面（東から）



RD011土坑 平面（東から）



RD011土坑 断面（東から）



RD012土坑 平面（東から）



RD012土坑 断面（東から）

写真図版9 RD009～012土坑



RD013土坑 平面（南東から）



RD013土坑 断面（東から）



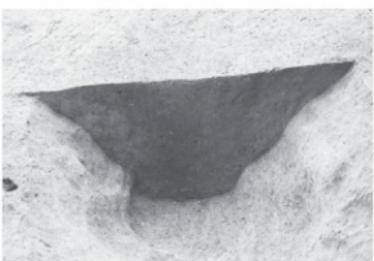
RD014土坑 平面（東から）



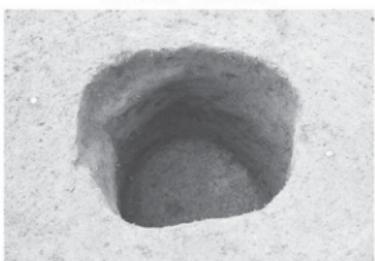
RD014土坑 断面（南東から）



RD015土坑 平面（東から）



RD015土坑 断面（東から）



RD016土坑 平面（東から）



RD016土坑 断面（西から）

写真図版10 RD013~016土坑



RD017土坑 平面（南から）



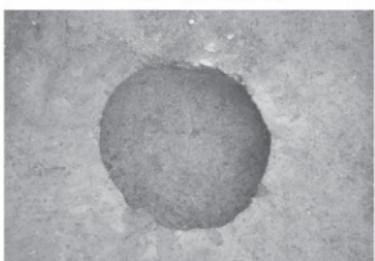
RD017土坑 断面（南西から）



RD018土坑 平面（北東から）



RD018土坑 断面（東から）



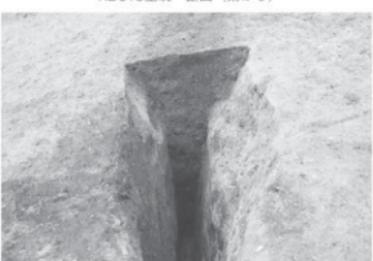
RD019土坑 平面（東から）



RD019土坑 断面（東から）



RD020土坑 平面（東から）



RD020土坑 断面（東から）

写真図版11 RD017~020土坑



RD021土坑 平面（東から）



RD021土坑 断面（東から）



RD022土坑 平面（東から）



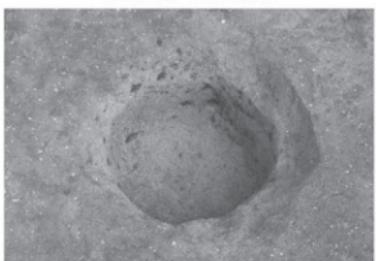
RD022土坑 断面（東から）



RD023土坑 平面（東から）



RD023土坑 断面（東から）

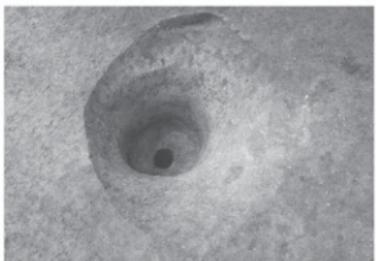


RD024土坑 平面（南西から）

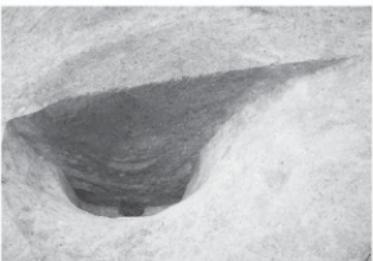


RD024土坑 断面（東から）

写真図版12 RD021～024土坑



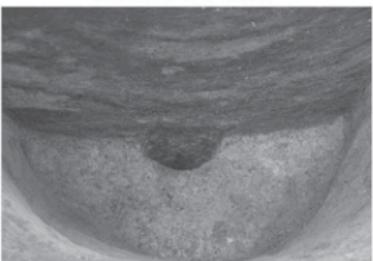
RD025土坑 平面（東から）



RD025土坑 断面（東から）



RD025土坑 副穴平面（東から）



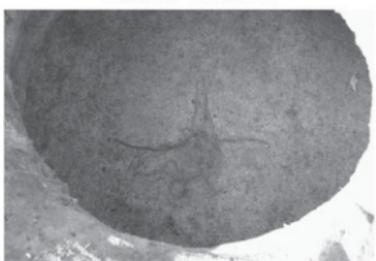
RD025土坑 副穴断面（東から）



RD026土坑 平面（北から）



RD026土坑 断面（東から）



RD026土坑 底面（北から）



RD026土坑 断面（南東から）



RD027土坑 平面（東から）



RD027土坑 断面（東から）



RD028土坑 平面（北から）



RD028土坑 断面（南から）



RZ002炭窯 平面（南西から）

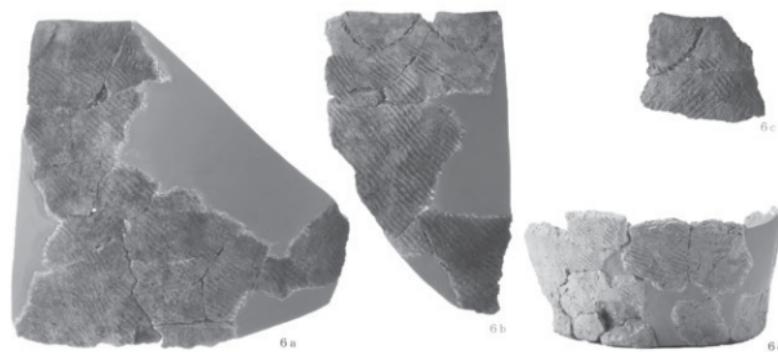


RZ002炭窯 断面（南から）



RZ002炭窯 断面（南西から）

写真図版14 RD027・028土坑、RZ002炭窯



写真図版15 壁穴住居出土土器

S = 1 : 3



写真図版16 土坑・遺構外出土土器



34



35



36



37



38



39



40



41

34・35・37 \approx 40--S = 1 : 3
36・41--S = 2 : 3

写真図版17 穹穴住居出土石器



42・43・46・47・50・51・56…S=1:3
44・45・48・49・52～55…S=2:3

写真図版18 壁穴住居・石器埋納遺構・土坑・遺構外出土石器

報告書抄録

ふりがな	つるかいいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	鶴飼遺跡発掘調査報告書							
調書名	一般国道4号渋民バイパス関連遺跡発掘調査							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第605集							
編著者名	丸山浩治							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2013年2月22日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度 分 秒	東経 度 分 秒	調査期間	調査面積	調査原因	
つるかいいせき 鶴飼遺跡	いわてけんもりおか市 岩手県盛岡市 たかやま1丁目 玉山区渋民字 二丁目 鶴飼47-15 ほか	03201	KE57-1125	39度 51分 10秒	141度 10分 30秒	2011.09.05 ～ 2011.10.28	4.874m ²	一般国道4号 渋民バイパス に伴う緊急発 掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
鶴飼遺跡	集落跡 狩場跡	縄文時代	堅穴住居4棟 堅穴住居状遺構1基 石器埋納遺構1基 土坑28基(フ拉斯コ 形2、円形14、溝形7、 長椭円形5)	縄文土器 石器	堅穴住居、堅穴住居状遺構、土器埋設遺構、フ拉斯コ形土坑は狭小なやせ尾根上に構築されている。溝形・長椭円形土坑はすべて斜面部谷状地形内に構築されている。			
		平安時代	炭窯1基			¹⁴ C年代は10C末～11C前葉。		
要約	鶴飼遺跡は北上川左（東）岸約500m、姫神山西麓の小起伏山地縁辺部に立地する。標高は203～215m。調査区内の微地形は、北側尾根部と南西向き斜面部で構成され、尾根部は幅5m弱とかなり狭い。斜面部には浅い谷筋が3条存在する。 堅穴住居、堅穴住居状遺構、土器埋設遺構、フ拉斯コ形土坑はすべて狭小な尾根部に構築されている。これらはいずれも縄文時代後期前葉の所産である。一方、溝形・長椭円形土坑のすべておよび円形土坑の大半は斜面部に沿って構築されている。これらは陥し穴と推定され、溝形については構築面が堅穴住居より上位であることからこれより新期に位置づけられる。 遺構種別毎の選地意識が明確に看取される好例である。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 605 集

鶴飼遺跡発掘調査報告書

一般国道 4 号渋民バイパス関連遺跡発掘調査

印 刷 平成 25 年 2 月 18 日

発 行 平成 25 年 2 月 22 日

編 集 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地

電話 (019) 638 - 9001

発 行 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所

〒 020-0066 岩手県盛岡市上田 4 丁目 2 - 2

電話 (019) 624 - 3131

(公財) 岩手県文化振興事業団

〒 020-0023 岩手県盛岡市内丸 13 番 1 号

電話 (019) 654 - 2235

印 刷 (株) 橋本印刷

〒 020-0015 岩手県盛岡市本町通 1 丁目 15 番 29 号

電話 (019) 652 - 1354
